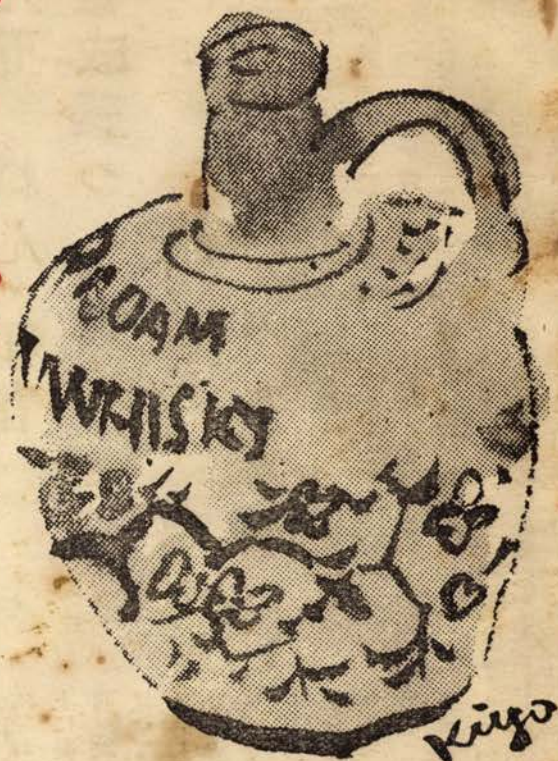


Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎 ☆ 主宰



新春號

No.272

川

柳

の 雅

証



路郎夫妻

笠置の亜鈍居にて

万滴撮影

不朽洞句帖

麻生路郎

白髪びやくの年がズレよがズレまいが
自由主義賀状一枚書かないで
オキユバイドジャパン春とは云ひながら
高たかいだけですと耐乏まだ続け
温故知新雑煮の味に変わりなく
君どこも寝正月かどみくびられ
元日を飲み友達と出てしまひ

一九五〇ねん・新春

の雑感三つ



文化國家と學者

私は新しい粒子、中間子が物理学上どんな作用をするものやら、何に應用されるものやら、人類にどんな福祉をもたらすものやら少しも知らなかつたし今でも判らない、従つて世界的學者湯川秀樹博士の存在を知らう筈もなかつ

た。ノーベル賞が日本の湯川博士に授與されたと云うニュースによつて始めて博士の存在を知つた。
迂遠な話であるがノーベル賞を授與されなかつたら、おそらく同じ世紀に呼吸してゐると云うことすら知らずに終つたであらう。この意味に

麻生路郎

於てノーベル賞が有意義だつたと云えよう。
私を知ると、知らぬと關係なく、湯川博士の中間子の研究はグン／＼と進んで世界的物理學者としての權威であることに間違いないとしたら、湯川博士にとつてはノーベル賞を授與されようと、授

與されまいと、それは問題ではなかつたであらう。新聞紙上に発表されている博士の写真を眺めても、僅に白い歯を見せていられるだけで、格別うれしそうな顔もしていられない。呉れたから貰つたと云う顔である。尤も研究費と云うものは幾らあつても余ると云う性質のものでないから、ノーベル賞金が次の研究に役立つことは云うまでもなからう。その点では大いによろこんでいられることであらう。
學者はそれでいゝのだと思つたからと云つて急に偉くなつた訳でもなく、今更のよう

に世界的學者扱ひされることは却つて苦々しいことに違いない。
文化國家を目指す日本はすべての學者に対する態度を今少しくと云うよりも今後大いに改める必要があると思ふ。湯川博士がノーベル賞を授與されることになつたので、衆議院で、はじめて感謝決議をするなどと云うことは今まで何も知らなかつたことを告白するようなもので代議士諸君の名おれでなくてなんであらう。ローマは一日にして成らずで、湯川博士そのものはもう十年も昔に日本で生

男女両性に作用する

プレホルモン

塩野義製薬

皮下注射・錠劑



SHIONOGI

産され、アメリカへ輸出さ

れ、向うで加工されて、はじ

めて賣品になつた訳である。

日本にはまだ第二第三の湯川

博士が存在する筈であるが、

徒らに生産費や加工費を惜し

み、半成品のまゝで倉庫の隅

に堆積させているのではある

まいか。

東大文学部の講師魚返善雄

氏の個人白書によると、一ヶ

月のサラリーが千円だと云

うことであり、三つの大学を

かけ持ちして漸くにして四千

円の収入だと告白されている

。更に氏は「かりにも武器

を捨てて文化を目指すからに

は、學術の信用を不当に切り

も、湯川博士が世界的物理

学者になれたのも、日本と

云う國が学者を虐待したか

らだと云えるかも知れない

が、一人や二人の世界的文

豪や世界的学者が出たから

と云つて、文化國家の水準

がどれほど上昇するかは疑問

である。

眞に日本が文化國家を目指

しているのであるとすれば要

は大多数の学者の優遇、大多

数の文化人の尊重以外に策は

無い筈である。

私は湯川博士のノーベル賞

問題に關聯して一つの提案を

しておきたい。それは湯川博

士がノーベル賞をうけられた

れるの醜体を演じて恥としな

いのである。

近い一例を挙げれば、昨秋

の朝日新聞に、学習院の教授

ブライス氏が、俳句や川柳を

世界に卓越した短詩であると

推奨されたので、はじめて見

直すこと云つたありさまなの

である。しかも、それが一新聞

記事であつて、果してブライ

ス氏が、どれだけの研究をつ

まれたものであるかさえ一顧

の検討もせずに、消化してし

まう、強健な胃袋の持主のあ

るのには驚歎を禁じ得ないの

である。と云つたからとて、

外人に示教されたものが必ず

しも間違つていると主張する

後も初日を拜んだと云う記憶

が少しもないがどうしたわけ

だろう。ただ何んとなく気が

腐つて、早くから戸外へ出る

氣持にならなかつたらしい。

こゝ幾年かはたしかに元日の

太陽を忘れて暮らして來たの

である。ことしは一つ早くお

きて、紫雲の裂れ目に血走つ

たような眞ツ赤な太陽を仰い

で童心をよみがえらしたいも

のだ。

すべてを忘れない

私は時々、何も彼

も忘れてしまいたい

と思うことがある

が、人間は案外つま

らんことを、いつま

ことにせいこうしたら、今の

私の仕事を廃めなければなら

ないが、廃めたら何をして生

きるだろう。不意に眼を奪は

れたとしても、文字を忘れる

ことは出来ない。自分では見

えなくなつても何へんに何と

云う字だと考えもし、云いも

するだろう。眼があいている

時よりも、ハツキリと文字が

見えぬ眼の前に浮ぶのではな

かるうか。

忘れていた日の出

以前はよく 元日の黎明

に、初日を拜んだものだ。そ

の時の澄み切つた崇高な感じ

は今も忘れられないが、戦争

のドサクサで永い間、初日を

拜まなかつた。眺めると云う

言葉では云い足りないので拜

むと云つたが、この場合、宗

教的な意味は含まれていない

のである。戦争の間も、敗戦

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

若し、文字を忘れる

思う。

最短時間で結ぶ

大阪-名古屋

時間25分

毎日3往復

特急料金 ¥5.0

上本町発 7.40 12.40 16.40

名古屋発 8.05 13.05 17.05

近畿日本鉄道



謹んで一九五〇年

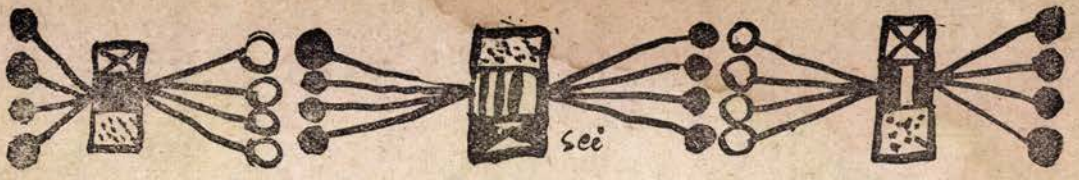
の新春を賀し併而

柳人の精進を祈る

一月一日

川柳 雜誌 社

川柳 不朽洞會



堺市 中島生々庵

いきどほりすなほに云へて涙ぐみ
断じて行へばそれ島の内に家が立ち
人前は倦怠期などごめうと箸
税務署の通達決闘状に見え
しめつばいこんな男が儲けてる

兵庫縣 奥村丹路

爪剪に子の指あまり細ければ
子よ時に憎しみの眼を父に射よ
過去ばかり思ふ淋しい酒になり
才能がないとは眞実思ひるす
両の手でわが盃を妻は受け

大阪市 武部香林

ボス或る日ビールを提げて来るのなり
ホトトギスのごと産みつける人絶えず
訪えば緋の絨氈が射すくめる
鯛のやうにくたびれた男なり
長男が逝くとも知らぬ避妊薬
針貸してから独身だと判り
誘惑をさけて会社をそつと辞め
サラリーといふ氣安さがすばらにし
大掃除防毒面がぬつと出る
アルバイトダンスに行くぞ知らず買ひ
休職は古い名刺を出したが
B1の少し足りない養子来る
医者はある貴方ですかと痔へ話し

兵庫縣 戸倉普天
身の上も少し話して四疊半
買出し列車風景
腰かけりや隣の闇屋に叱られる

孫抱いて席を譲つて貰う年齢
戦争で立つた煙突草が生へ
村長就任
われもまた人並み何がやれようぞ

奈良縣 上田翠光

農繁期乞食もお世辞言うていく
後姿を霧の深みへ見送りぬ
片言の紙を引きさく面白さ

横濱市 福田山雨楼

兒童図書整理す心あたたかし
駄でふと彼もそのかみ退めた人
田舎行損はしないと妻出かけ

池田市 戸田古方

門口のキスははべたですまされる
休日の子供の生熊みてすごし
格闘をするごときにかく勝つ巡查

布哇 内藤草一郎

家付きの方がお先へ飯を食ひ
悪魔とは知らず初恋皆捧げ
現実の非哀タルの穴に見る
舞踏会百万弗の後家と組み

東京都 川村好郎

文化の日菊は明治のまゝの色
自覚してゐますと言へどまだ二号
按摩また二度の戦災話し出し
親切が恣に交つてゆく怖さ

岡山縣 浜田久米雄

さゝやきのどかに恋の匂して
くしやみした途端打つ手を考へた
飲む程に酔う程に鞆ついて来る

栄轉のごに角二等乗車券
いまさらには五本の指のありがたく
平塚市 木村孤浪

誘惑を始終女は待ちうけて
安産にホツとした妻にホツとせり
黒板を見い／＼さしみ注文し
貰はれた当座を猫も思ひ出し
アベックが離れシャッター切りそこね
父逝つて一年菊の小さくなり
菊の花父の写真の前に先づ
十一月一日右側少してれ
珍らしく来たのは少しあてがあり

大阪府 西尾栞

集金のもらへば話軽く切り
大牟田市 高田抱逸
峠茶屋五球セットを聞いてゐる
義理に來た見舞退院跡だつた
失業の或日は密輸考へる
ダンス狂会計主任を左遷され

大阪市 市場没食子

人前を償ふ愛の言葉吐く
鼻唄も父のは古いマツクロケ
未だ鹹にならず人後についてゆく
無言の抗議うちはあそこで買ひません
名古屋市 吉田水車
勤続三十年重役にもなれず
宿の事も少し手傳う女連れ
菊の世と言ひける酒に

須崎豆秋

迎 春
ろうそくだマツチだ一九五〇年
ききわけてパンでも食べてくれる猫
電柱へ上つてもらふのにも酒
公孫樹ハラ／＼蕉翁は旅に寝て



名古屋市中西おさむ

腹のたつときに煙草も道具なり
煙草の火借りられてゐる背の高さ
ぼとんぼとん水のたれてる妻の留守
もう一度でてみなければとすゝめられ

大阪市 正本水客

寝返れば燈台の灯がもう見えす
先代の眞似もしてみる金詰り
時計きつちり合わして夜行寝るとする
板の間へ手紙を置いて帰つてき

男四十ぞうきんに似て破れ
妓には勝てぬ上役ばかり酔ひ
ちと色が悪いがうちでどれた茄子
出駄羅目な世にてたらめな夫婦住む
子を連れて四十の坂を囲はれる
雨寂し迎へて呉れる傘もなし

神戸市 竹内潮花

大言壯語大きく買われ田舎落ち
皺の中から老眼鏡の温かく
披露宴礼服ばかりしやちこぼり
看護婦戴帽式に臨み
戴帽へよく似合ひますとも言へす
戴帽へ花嫁の様目を伏せる

奈良縣 尾崎方正

寄附金を頼みに廻るシャツを更へ
お妾の方が次ぎく多産系
年下の男と世間狭う住み
國からの手紙夫婦の肩が触れ
十吾扮す婆さんに似た世帯主

大阪市 菊沢小松園

遅々とした生活今年も十二月
せまきしとねに猫も割込む
汲めばすぐつさる酒なりアハハハ

姫路市 夷一笑

岡山縣 大森風來子

編みながら歩かせながらしやべりに來
稻の出來聞けば百姓警戒し
こぼれ米のよう月給分割支給

鳥取市 中島鉄洲

休かと聞けば鬣首だと正直な
酒臭く儲ける話して去りぬ
果樹は兒に花は佛に庭狭し
雄弁会あの娘の末が怖ろしい
老人の部であり満で数えても
山に語れ山はこだまをしてくれる

どの髭もみな米代をかせぐ髭
長屋では惜しい名前に住んでゐる
子沢山風邪ひいた子は叱つとき
晚酌もきめて娘に養はれ
お悔みに行く鏡台に手間が入り

大阪市 橋本美奈子

金づまり二人を恋のまゝに置き
偽りの恋と氣付いた時おそし
老らくの恋は矢張り打算的
異状なし守衛のんきに髭をそり
虫の音へ一人淋しくひくギター
失恋をふんんど笑ひ生きてやう
出張の君が恣しい雨の夜

大阪市 水谷竹壯

下関市 國弘半休門
指の節ちつと見つめた日の感謝
直ぐこいと交番所から電話なり
八代市 佐野ト占
公僕の飲むことばかり考へて
すき腹を知り給はずに月は照り
打ち上げた花火の様な恋でした

兵庫縣 小沢史葉

兵庫縣 小西無鬼

階段を駆足させる金づまり
カム嚙めば大人意地汚なくも見え
柿一つ取るに迂り落ちたとも言へす

神戸市 大鶴喜由

木枯と共に居候一人來ぬ
サンシーも買えず留次郎留三郎
わたしの子鳩てなことに乗る娘あわれ
娘の氣長者もひるむ望みもち

大阪市 吉田斜水

皮肉にもランプを灯す文化の日
せめて我ラジオ放送して見たし
病⁺に妻に指図を受ける台所
表紙に表紙かぶせて何かを読んでゐる
嫁き遅れまた昇給をしてしまひ

大阪府 岡田紫雲

會計は病人え平氣で金を取り
廓に勤める妓定期券を購ひ
恋人にもう氣を許したる座り方

大阪市 土井文蝶

燒鳥になるとは知らず今朝も鳴き
食う丈が楽しみ秋の臘居さん
冬の風質屋入換期待する
義に固き人と生れて清貧な

布施市 糸本醉月

秋深し督促状が肥えさせす
金づまり整理品だとはでに賣り
食足れば奈良の鹿さへふえて來た
奈良縣 白牛奇朗
税務署が來てから寺院しんとする
対面通行師走の舗道突き当る
一キロへ餅網さらを買つておく

岡山縣 山分淑郎

新聞とラヂオ吾が家の文化の日



白菊の天ぶら食べて文化の日

大阪市 科 埜 種 美

夜寒しんしん鍋焼うどんの音がほし
銀杏落葉生命保険貸り立ち
せゝこましい所へ金を捨てに行き

奈良縣 飯 降 白 香

霧の駅へ私も下るその一人

奈良縣 西 辻 竹 青

傭人が手折つて帰る庭の花

吳 市 林 野 麴 光

酒は一口あと焼酎と早麥り
値上とは別に停電まだ続き

ケースからつまむと女火を付ける

大阪市 竹 田 芦 穂

蟲の声寄せては返すごとくなり

童心は美まし牧谿柿と栗

あんさんを忘れてなるか猪口をさし

小兒科でたいしたことはをまへんか

PTAわてこんなこといやだんね

西宮市 阿 万 万 滴

出馬表など見て宿直をひとり居る

死顔へ女医さん自分の紅をつけ

京都府 間 島 青 丹 子

ロケーション下つ端水に濡れる役
踏みつぶされた鈕が落ちて朝の駅

生活の余裕が欲しく子供抱く

大阪市 上 田 春 柳

交番の電話のベルが鳴つたまゝ

流行が僕だけ捨て、秋の中

針仕事少し休めと菊が咲き

大阪市 太 田 良 子

よれ／＼の服着てそれでも教授です

古くさい服着て借金どりが来る

晩婚といへど要るものだけは要り

居崎市 静 岡 忠 八

よそ行きの靴が盗れた慰安会
卸一つ盥の水と流される

階段をあがれば既に飲んで居る

大阪市 伊 藤 定 美

兄さまと書けば素直に走るペン
筆不精察して腹も立てず置く

岡山縣 丸 山 弓 削 平

切花の様にベットに病む娘
子の日記おや／＼ラヴの詩で埋り

あつさりどバツタは足を置いて逃げ

留守番の子は懐手して迎え

医者代が怖うておすがり申す神

猫ピアノへ上つて驚るくまい事か

ボールペンの様に娘はもう倦かれ

泣いて／＼／＼ 娛しい十八九

秋刀魚店に風に泪もかれてゐる

疊斯う廣かつたかなど秋の蠅

喉太う笑えば揺れる首飾り

恋の羽抜けて女跳びかゝり

岡山縣 直 原 七 面 山

未亡人一度落つれば滝に似て

褒められて娘話に乗る積り

唯笑んで別れる恋に疲れ果て

バイブルを持つ者同志にへ切らず

愛情を割引された接客婦

裏切りへ死んでやりたい水の色

死ぬ程恋してゐたに死にもせず

終列車ラブシーンもありスリもをり

未亡人太つた体休つめられ

見つめられあわて、隠す膝坊主

セーラーで男を知つて悔もせず

一徹な娘心へ逃げ切れず

淋しくはありませんかご月並みな

純情の看板今宵降をうか

唯恋に生き抜く身をば羨まれ

岡山縣 黒 田 笑 泉

トラツクの便乗でゆく里帰り

ネクタイはあの妓の好きな柄をしめ

思ひ出は煙草半分灰にする

薬局の見易いどこへ避妊薬

信 貴 山

紅葉低く燈籠のまだ続き

法 隆 寺

廻廊よ遠き飛鳥を語れかし

兵庫縣 石 岡 正 司

ピアノ弾く別荘賣りに出る話

大問屋訪ねりや露路の二階也

角帽でピトスの喫える身分なり

社長室俸の様な税吏来る

大阪府 西 森 花 村

懺死体コスモス未だゆれやます

ラツシユアツお相撲さんも押しこまれ

泥酔が今日の盛会祝し合ひ

鳥取市 河 村 日 満 子

家族慰安会に出演して

違つたを知つてゐるのは師匠だけ

ストもまた辞せず人員整理蹴る

執行部にあとは一任してわかれ

松山市 前 田 伍 健

老夫婦寒き暑さの論もして

盗人に備へた犬が盗まれる

金詰りトン／＼建つは官舎だけ

とりまきが居つて素直な娘になれず

相づちをうち行き違う田舎みち

白山の雪が目立つて冬仕度

大阪市 橋 本 緑 雨



坊つちやん祭

前田 伍健

松山市と松山観光協会主催で十一月十一日より十三日まで漱石の坊つちやん祭が挙行されました。賛助の意味で川柳大会を道後公会堂で開演し盛況！それはそれとて、道後温泉事務所から特使あり、坊つちやん祭の仮装行列に参加の坊つちやん座登場人物の相、衣裳、持物、等々々見当がつかぬので、一つ決定指揮を頼むとの事、幸ひ、映画と、猿之助一座の「坊つちやん」を見て居た記憶が、まだ残つて居たので、應來と、腰を揚げ、従業員を一々呼び出して、松王丸もごきの顔実見！

「狸校長うらなり、野太鼓などは、時節柄、あてはまる人相が樂であつたが、マドンナは、近頃の丸顔式お嬢さんでは氣に入らず、あれか之れか、赤シャツ、坊つちやん、山あらしなごなか／＼人選に困り、折角の長髪を丸刈にして貰つたり、髯を剃り落してと頼んだりして、納得させ、衣裳、持ち物も幸い道後は非難災町とて、おまけに旧家が多く、深張洋傘、フロックコート、黄八丈に赤シャツ、ピロッド製のカバン等も揃い、坊つちやん音頭(佐健作詞)で押出し、ヤンヤの大喧嘩と一等賞を授與されました。尙、この祭には元大映の人気者大山テア子氏も(松山在住中)飛出し、笑はせま

した。坊つちやん音頭は――

さあさ歌えよ坊つちやん祭お温泉の道後のローマンス
ハヤシ「狸校長も赤シャツも花のマドンナ、うらなりもドント野太鼓山あらし、さつき踊れよ踊らんせ、文豪漱石こそ舞台踊りつかれりやお温泉がある、ラシモ、ナイ／＼エーナモシ」
以下略(数章あり)註ランモナイ(仰山な、大変な)の意味――
さて以上の通りでは、單に坊つちやん祭の報告ですが、芭蕉翁の



安樂死

浅田 右聞

うらめじやせがれ本氣で殺したな
右聞

十三年間中風で寝ていた母親を「殺してくれ」と頼まれたとて、胃酸で殺した件を「安樂死」として新聞に出た。この食糧難に食慾はおせいで、小言は多い、伴夫の迷惑は察するに余りあるが、この病氣はぐちも多く「イツソ殺しておくれ」位はじよつちや

云う「夜の梅」「乞食の合さい袋」何んでも彼でも見て置き、聞いておく事、世の中は総て川柳縮図、この設計にも私の川柳体験が、そのまゝ或は姿を変えて、働いて居た事を、申添えておきます。よい修練の一と汗かいた道場日でした。

社の黒板

▼随者の方で句会案内の欲しい方は社内句会係まで申込んでおきたい。案内をうけても、続いて出席出来ない方は、病氣とか、仕事かメチャ／＼に忙しいとか、出て来れない理由を知らして欲しい。永い間、欠席してゐる方で、亡くなられた知らせを、死後二、三ヶ月も経つてから、遺族の方からうけると、ホントに淋びしい感じがする。お互はモット心の友でありたい。

謹賀新春

(柳人交歓ページ)

不朽洞

麻生路郎

麻生茂乃

大阪市住吉区
万代西五ノ二五

中島生々庵

大阪市南区饒谷中之町二〇
電話南三九八四番
自宅 堺市淡路寺諏訪森西三丁目
電話 淡路寺 八二四番

小兒科澤田醫院

沢田四郎作

大阪市西成区玉出
本通一丁目一三

武部若菜

武部香林

大阪市東淀川区三津屋
北通四丁目二一九

戸倉普天

兵庫縣水上郡
沼貫村小野

三條東洋樹

神戸市(中央局区内)
兵庫区神田町七九
電話 元町六五八六番

奈良縣宇陀郡三本松村

上田翠光

土井文蝶

大阪市西成区松通
九丁目二十三



民族藝術と しての川柳

飯降白香

民族藝術といふ語が最近喧傳されてゐるがその本質並びにそれと川柳との關係を檢討してみたいと思ふ。

一國の民族藝術とはその國の大多數を占める民衆によつて産出され支持され享受される又はされた藝術であると思ふ。この立場に於て日本の傳統藝術を觀察するのに總てがすべてそれであるとは断言出来ない。現在日本に行はれてゐる傳統藝術と稱せられるもの——能・狂言・茶湯・生花・歌舞伎・淨瑠璃・短歌・俳句・川柳等——が果して民族藝術たりうるかは疑問ではあるが、これらを一應民族藝術なりと仮定して、我が國の傳統藝術の特徴を考察してみよう。

演劇・舞蹈にしても單に演技者の才能を必要とするばかりでなく、観覽者の共感を考慮することによつて初めて成立し、又和歌・俳句・茶の湯にしても決して孤高獨樂を本質とすると主客の会合に意義をもつたわけで、これらの藝術は一般に造型藝術のやうに具體的に作品を残すといふことではないが遙かに急速に廣範に民衆生活に食込んで行つた事實はみのがす事は出来ないとおもふ。

二、これらの藝術の大部分が封建社會の所産であること、この事實は日本社會の歴史的發展と深いつながりをもつわけで、日本に於ては封建社會が極めて長期にわたり、明治維新によつて近代社會に入つたといふもの尙、封建的遺制を多く残して今日に至つたのであるから、大部分の傳統藝術は封建社會の所産といへるわけである。

以上の考察から現在の傳統

藝術は中世的封建社會の藝能にありといつてもあやまりではなからう。

さて中世藝能で民衆に關係深いものといへば狂言と連歌をあげねばならないであらう。狂言については松本新八郎氏は「狂言は本來能とは別個の起源をもつものである」として能と狂言の形式上の差異をあげると共にその成立については、当時の農民が長い王朝的鎌倉の專制支配から百年に近い内亂を経て、自己の自由で獨立した生活をかちとつた農民自身のよろこびの言葉であり、農民がこの内亂によつて達成した文化革命の一つの成果が狂言であつたのであり、彼らが絶えず農村中心の社會を上演して、これをみづからの楽しみとしたからこそ素朴ながらも能は勿論、如何なる他の文學も及ばないほどの豊富な内容と創意をもちえたのであるとのべていられる。たしかに狂言が南北朝の内亂によつて生み出された農民の立場に立つ大衆的演藝であることを提唱したものである。がしかし唯農民と限定するのでなく、これの外に下層の武士階級や名主と称される人々を含めてつまり主として下人層を主体とする階層に育成されたことは論をまたない。能の王朝的理想世界追求の夢幻的性質を具有するといふこと、即ち中世の貴族たち

川柳料理曆

—卷の冬—

水谷竹莊

組州から籠で乗り込む寒見舞

たいがい喉つて蜜柑の筋をと

冬の果物の代表的なものは蜜柑でせう。寒い夜、一家揃つて火鉢のそばで、蜜柑の皮をむきながら、世間話をする時、又は芝居や映画に、持つてゆくし、双六や福引の賞品にも、蜜柑は年頃の娘さんで色氣つくと、蜜柑は年頃と重宝がられます。みかんの砂糖漬や、色々の和洋菓子等、料理法に岩しま

蓮根はこら折れと生れつつき

蓮根の皮は極く厚くむくとよろしい、又茹でる時に少量の酢(水五合に付酢二勺)を加へ湯を多くしてゆて来ます。但し鉄鍋、或はアルミニウム製の鍋にてゆでると、眞黒になるか、又は、紫色に変わる恐れがあります。瀬戸引鍋や銅鍋は変化いたしません。蓮根も、乙な梅肉あへや、白煮や、変つた料理法が沢山あります。

すはと云ふ時鳥賊の吹く最期罌

烏賊も刺身から惣物、煮合、天ぷら等々、どんな料理にも使用出来ます。その中で、食通に喜ばれ、いつまでも置いてゐても大丈夫な、いかの塩辛の、作り方を申し上げます。

極く新しい烏賊を、洗ひあげ、小さく切つてから目に塩をふり、かめの中に貯はへますと一週間位で喰べられます。好みによつて、粕を入れても結構ですが、よく塩が、慣れから入れた方がよい様です、又麩漬、うに合へなご珍味として突出し料理に使はれます。

寒見舞鴨先き／＼を飛びあるき

ちん／＼鴨々と云ふ言葉があります。好きならんとさし向ひ、四疊半、丸窓、雪、炬燵、合鴨のスキ焼、こんな情景が、ちん／＼鴨々でせう。

鶏は追ひつめられて五尺飛び

さいはいのやうに鶏腹を立て

冬の温い料理の中で、かしの水焚は其の王座でせう。作り方も色々ありますが、本場の九州博多の鶏の水焚の作り方を申し上げます。

トキを告ぐる位の牡鶏一羽、水約一升、若い鶏をよく洗ひ、骨共に一寸位に切り水と共に鍋に入れて強火にかけ、沸騰する間に浮ぶアクを丁寧によく捨てる、火加減を極く弱くして約二三時間続けま

すから、肉は箸でチギル様になりますから、なるべく汁を、にごさぬ様にしておきます。別に楳は鉢巻をする様に中央の処を横に皮をむき、二ツ割として汁を絞る

ぬ様にしておきます。別に楳は鉢巻をする様に中央の処を横に皮をむき、二ツ割として汁を絞る

ぬ様にしておきます。別に楳は鉢巻をする様に中央の処を横に皮をむき、二ツ割として汁を絞る

ぬ様にしておきます。別に楳は鉢巻をする様に中央の処を横に皮をむき、二ツ割として汁を絞る

ぬ様にしておきます。別に楳は鉢巻をする様に中央の処を横に皮をむき、二ツ割として汁を絞る

が理想を追求することによつて現実を逃避するということは少しでも人間性を何等かの方法で、維持しやうとしたに反して、懐疑的に現実に対して鋭い抗議をなげかけたり現実を剔抉することによつて却つて現実を否定しやうとする狂言のあり方は、より人間のであつたといひ得ないだらうか、そしてより民族的であつたといひ得ないだらうか、

この能と狂言との対立が茶の湯に於ても「茶教寄」と称せられる貴族的な茶の湯と「茶寄合」といはれる庶民的な茶湯の会合の分裂を産み、更に連歌に於ても堂上風の連歌と花の下と称せられる民間風の連歌の生ずる社会的基盤をつつくたのではなからうか

「花の下」といふのは菟玖波集の序の「或詠花下一或嘯二月前二之輩名譽雖垂二後世一佳句不傳云云」とあるのに因るもので、筑波問答に後嵯峨天皇の御代の連歌流行の様を記して

「地下にも花の本の好士多かり
しかども云々」

又「道生寂忍無生等いしもの等
毘沙門堂法勝寺の花のもとにて
よろづのもの多く集めて春毎に
連歌し侍りし」

と記しているやうに、もとは花の下で連歌会を催された時地下の者で、その席に列する

ことを許されたわけで、この花の下の連歌は今つたわつていないが、狂言と歌集や閑吟集の中の

「独り寝しもの憂やな 二人寝
寝初めて憂やな独り寝」
「独り寝はするとも嘘な人は嫌
よ 心は盡いてせんやのう
世の中の嘘が去れかし 嘘が」
「新茶の若立摘みつ摘まれつ挽
いつ振られつそれこそ若い時の
花かよのう」

三 光

金沢 K 生

この頃課四選句で「天・地・人」の代りに「A、B、C」をつけることが流行つてきた。

別段それが悪いという訳でわな
いが、殊更英文字を冠すにも至る
まい。私「三光」がなつかしい。

俳入でこの三光を「日、月、星」と選んだのがある。時代の流行でも正可、今後「火、水、木」ともつかまい。

X

句に曰く
▼宵の口、ABCの習いがけ。
▼はやらなくなるゝ花魁名を変え

る

の歌の如く何等社会的方面の暗黒さがなく人間の自由と眞実が強く要求せられて封建的或は家族的關係からの社会的束縛が殆どあらはれていない、そしてどれもが日常の生活からほどばり出た感情であり、最も豊かな人間性の表現であるこゝういふ傾向内容を

本質的にもつていたのが「花の下」の連歌ではなかつたらうか、私は川柳といふ名称は江戸時代の所産であらうが、その本質的にもつて内容はこの中世の狂言小歌集や閑吟集や又連歌花の下の流を汲むもので、こゝに本當の民族藝術として、川柳の面目を觀るのである。成程近世は町人階級が抬頭し庶民文化が著しく発達したやうであるが、又事実達したのではあるが、それらの庶民は中世にみることに出来ないので、封建的身分關係の最下層に圧迫せられたなから変態的な花として咲かせたまでで、そこに正しい意味の人間解放健康な意味での人間解放ではなかつたといへる。現代の川柳が俗語平言を用ひた七音字の人間陶汰の詩と定義されるのは、この中世の民族藝術の傳統に立つてこそ成長するもので人間のなにもに深く強く強い関心を持つ社会的基礎に立つての人間解放であり、その中心になる人間性は弱点をもつ人間の良さといつたものから、更に高い教養へまで高められねばならないと思ふ。

以上のやうな意味に於て、民族藝術としての川柳の發展を祈つてやまない。

油を加へ橙酢を作つて置きます。葱は小口から細かくきざみ、布巾に包んでもみ水でさらして絞あげます。鶏に橙酢をつけて食べ、汁は猪口にくみ出して、食塩、生姜、等にて好みの味をつけて吸ひます。葱は薬味として用ひます。古句に

新世帯強飯が出来粥が出来

釜メの値を聞きにくる新世帯

新世帯疊の上で味噌をすり

昔も今も、新世帯の嬉しさは変り
ないと思はれます。味噌の種類だけ、一寸書いて見ます。作り方は長くなるので略します。

白味噌、赤味噌、三州崎岡の八丁味噌、鯛味噌、柚味噌、金山寺味噌、鉄花味噌、胡麻味噌、鳥味噌、玉子味噌、田楽味噌、木ノ芽味噌、さんじ味噌。

みそかそば、(又は運そばとも言ひます)を味つて貰つて、年の暮にふさわしい古川柳を並べて見ます。

年の暮咄の奥に春があり
十二月人をしかるに日を致へ
年忘れ務て来たて叱り忘れ
來年の櫛に手のつく年忘れ
二年越たれてる除夜の長雪
色文だ覗くといふ火三十日
大三十日息災ばかり取柄なり
どうだなと隣へ見舞う大三十日
そばで美味しいのは茶そばです、
そばは、そば(かまぼこや玉子
焼、トロ、昆布、かしら、葱など
好みのものを入れる)、ざるそば
天ぷらそば、洋風にしてカレー南
パン、きつねうどんをそばにした
のをたぬき、支那料理の焼そば、

五目そば、等、好きなそばを召上つてよい年を迎えて下さい。

謹賀新春

山口縣小郡駅
長野井蛙

石田 沐天

阿都野区阪南町西二ノ三

大阪市北区北扇町四六

波 辺 号孫 完

教育楽器はヤマハ

日本楽器

南區心齋橋筋二丁目ノ一
電話 南 3413 番





川柳に詠まれた葛飾北齋

阿達義雄

北齋は年少の時、彫刻の業を習い、後に画道に入つた人である。勝川春章の門に浮世絵を修めていたのであるが、狩野派にも学ぼうとした爲に春章から破門されて了つたのであつた。宝暦十年に生れ、喜永二年に九十歳で歿しているから、大体に於て、川柳と浮世絵の黄金時代から墮落の時代にわたつて、生きていたと言えよう。

本姓は中島、名は爲一と言ひ、幼名を時太郎、後に鉄藏と改めている。兩名と住所を變更した度敷に於ては、古今無類である。檜崎宗重氏の「北齋論」によると、其の画名は、春朗・群馬亭・宗理・俵屋宗理・百川宗理・菱川宗理・北齋宗理・可候・北齋・不染居北齋・辰政・錦袋舎・画狂人・画狂老人・九々屋・戴斗・雷震・天狗堂熱鉄・鏡裏菴梅年・月癡老人・前北齋爲一・爲一・不染居爲一・藤原爲一・卍・百姓八右衛門・三浦屋八右衛門・土持仁三郎・是和齋・魚

佛・穿山甲と云う風に変えも変えたり、三十一回変えてゐる。次の句は北齋自ら作つた句である。

性ハ爲名ハ莊字は郎としやれ (九一)

右の句は原典のまゝ示したものが、前掲の多くの名と照し合せてみると、

姓は爲名は宗字は朗としやれ (九一)

とでもすべき処を、書写する者が書き誤つたのかも知れない。不染居北齋とか、不染居爲一とか号すだけあつて、何処へ行つても居候のつもりで居たのであろう。爲宗朗は即ち居候と通ずる。即ち爲一の爲、宗理の宗、春朗の朗を合せたものである。(幼名の時太郎とも考えられる。)北齋は其の名を屢々変えた様に、無暗に轉居する奇癖があつて、一生の中に九十三回、その居所を移したと傳えられて居るから、何にしても尋常一樣の人間でなかつたことだけは確

かだ。尙、ついでながら、藤懸博士の「増浮世絵」に載せられてゐる北齋改名一覽表によると、卍の名は文政十年八年に用いられ、文政九年から天保三年迄用いられず、空白なものとなつてゐるが、北齋が川柳・狂句に於て卍を用いたのは、「柳多留」八十四編から百二十五編に亘り、實際、卍の号で北齋の句が載つてゐるのは、文政六・八・九・一〇・一一・一二年、天保元・二・三年の編である故、このプランクは埋めて了つて、卍を用いたのは、文政六七年頃から歿年に至る迄ともよいと思ふ。

北齋だれと摺物を撥で寄せ (五二)

本所だれと摺ものを撥で寄せ (一六三)

今迄、三味線を弾いていた女が弾くのを止めて、傍に出された北齋の綿絵を、撥で自分の方へ寄せたといふのかと思ふ。乙句は、甲句を別の者が一語だけ入れ換えて出しただけのもので、剽窃の亞流だが、怪我の功名で、右句の開巻された天保六年十一月二十七日頃には、兎に角、北齋は本所内に居たらしいことが分る。一生の間に九十三度も轉宅したと云われるが、一体、江戸中を轉々として引越したのであろうか、それとも本所内を廻り歩いたのであろう

謹賀新春

(柳人交款ページ)

尼崎市武庫之莊四丁目四三

奥村丹路

大阪市東住吉区平野西之町八三

橋本緑雨
橋本美奈子

阿倍野区旭町三丁目一四

須崎豆秋

何処をどう切りぬけ
たのかとその人

吉田水車
名古屋千区種親月町一丁目六五 電話 東四八八六

布施市長堂二丁目二七

永田里十九

浜田久米雄
岡山縣和氣郡吉永町福満

淡路津名郡志筑町

大坂形水

元旦の足袋は冷たく暖かし

中西おさむ
名古屋市南区城下町二ノ五

木下幽王

グアイヨ産業株式会社
電新町一〇六番
自宅 阿部野区帝塚山西ノ土

大阪市(都島局区内)旭区
古市大通四丁目五十一番地

川柳雜誌社八代支部

佐野卜占

吳市吉浦中町二丁目

林野甦光

八代市浜成町六一四

か。北斎の生れたのは本所割下水であり、この頃も本所だとすると、恐らく後者であるう。

さて、次に掲げる五句は、みな「柳多留」第九十六編の「丑楽評」の中にある句である。北斎は、「柳多留」第八十五編の序を書いた位だから、句の選もやつたのであるう。北斎のことを詠んだ五句共、丑楽評の中にあり、他の評の部に入っていない点は大いに注意すべきである。参考の爲に作者の号も附記することにしよう。

爲一ツは大きな馬で名をひろめ
 (九六) 横 月
 爲一ツが馬のきん丸八疊じき
 (九六) 藤 丸

北斎が雄心勃勃たる画家であつたことは、そり立つ巨大な容量感を起させる富士、捲き返る巨浪、山中の木挽の足下に踏まえられる小さき富士等を見ても分るが、彼は好んで大画面に揮毫した様である。江戸の隨筆「忘れ残り」を見ると、

北斎大馬

本所合羽干場にて、せんくわ千枚つぎに墨画の大馬を画きたり。棧敷をかけて見せたり。とあるのが、それであろう。

「せんくわ」は仙花紙で、質厚く、極めて強い色の純白でない楮製の紙で、袋紙又は合羽の地紙とする紙のことである

尙、北斎はこの他に、名古屋の西本願寺別院で、百二十疊敷の大達磨を画いたと言われている。

漫画とは言へごみだりで無い手本
 (九六) 牡 蝶
 北斎の漫画について、藤懸博士は、

「北斎の特色を」とまとめにして見ることの出来るものでは、北斎漫画十三編がある。これは実に北斎の画想をさらけだしたもので、意匠の豊富にして、妙案の湧き出づる有様は、他の人々の及ぶ所でない。北斎漫画は北斎を知る爲めには、最もよい材料である。要するに、この漫画の内で、十分に窺ひ知られる所であるが、森羅万象を捉へ、総てを活躍させるのは、これまた北斎の特技である」

と言われているのが、右句の何よりの解釈となる筈である画の爲に一ツ心くだく筆の道
 (九六) 巨 眼

北斎の名、爲一を二つに割つただけの句であるが、然し、北斎について、藤懸博士も「北斎は貧困と戦ひつゝ、諸派の筆法を修め、それを自己の想中に融化して、特色ある作品を数多く作つたのである。九十年の生涯は実に努力精勵の一貫したもので、肉筆絵にも、版画にも、之く所として可ならざるは無かつた。」記されている。

北斎が美女は三步が六にしき三分の美女は、勿論當時の上

妓たる畫三で、大錦は奉書二つ切の錦絵のことである。
 年頭の抱負 (ハガキ體)

夷 一 笑

最近のニュースで話題になつてゐるのはノーベル賞に輝く湯川博士である。將來川柳界から文学部内のノーベル賞授賞者が出ないとは何人も斷言出来ないと思ふ。もつとも日本人自身が川柳視を誤つてゐる間は望むべくもないのであるが、少くとも近い將來に於て實現の可能性は有ると思ふ。こう云へば、彼は誇大妄想狂であると言ふ人があるかも知れぬ、しかし、ノーベル賞が全世界文学の一つの最高目標であつて見ればやはり我我川柳文学も一應目標をそこに置いて精進するべきではなからうか、嵐をつききり、砂漠を渡り、ジャングルを切り開き、後劍を一步一歩よち登つて、はじめて輝く希望峯に達するのである。

一九五〇年は一つ大いに努力しようではないか、今や我々川柳作家は全世界に向つて躍進しなければならぬ時が來てゐるのだ。

一九四九・一一・二四稿



横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇 福田山雨楼	清水市下清水四九一 富士野鞍馬
前田健伍 松山市眞砂町二二	水谷鮎美 尼崎市西字口開一八一
北川春巢 高知市室町九六ノ九 月原宵明	高田抱逸 勤務先 三池染料管理課 自宅 大牟田市瓦町二四 上石切三六一
川雜久賀支部幹事長 岡村路三 山口縣大島郡久賀町	岡山縣淺口郡船穂町早崎 山分淑郎
糸本醉月 鳥取市叶三八一 河村日満子	京都市相樂郡木津町 間島青丹子
廣島縣賀茂郡竹原町 竹原專賣公社出張所内 弘津柳慶	今治市神明町 長野文庫 川柳沙風同人
阿倍野局区内王子町二ノ五三 山本葉光	和歌山市今福北部一二八 秋月宏方
愛知縣知多郡大府町 新海吐平	鹿兒島縣岩川町五拾町 西祐宗号(華水)
鳥取縣氣高郡吉岡村吉岡 田中遊星	鳥取縣叶三八一 前田至高
高知市長浜町平和藥局 岡本雄吉 号元馬(襲名)	鳥取市南本寺町三六 羽野朱雀



エロ本を父にさくられるるを知り 奈良縣宇都羅
 税きびしされど冬梅冬つばき 同
 闇のかね子は悴せをよるこばす 同
 四十年あわぬ女よ白髪染 同
 城内で堯山焼のけむり上げ 同
 税々に父の淋しき年のくれ 同
 正月のホ旬食ふこと遊ぶこと 同
 プレーキの音にくれたエチケツト 熊本縣一舟
 ダンサーの身の上等は聞かぬもの 同
 全敗を喫し此の後に学ぶもの 同
 それ程の子でもなのお茶を絶ち 同
 コーラスの様に子供に泣かれけり 同
 食糧事情よくなりました犬を飼ひ 同
 付け馬で帰り御主人様だとき 大阪市ひさみ
 役人のペン／＼草の様な髭 同
 ちとやばと思へど恋の意見する 同
 足組んでパイプのこげるほく吸うて 同
 半処女も非処女も悔ひぬ恋におち 同
 氣晴しに飛んでる姿赤トンボ 愛媛縣旭童
 せまいとこよつて飛んでる赤トンボ 同
 大根の太る雨なり朝寝する 同
 全身で怒つたところで小男の 同
 金づまり肺病の如進んで来 同
 きゝ手まかせの落葉哀調 愛媛縣曉童
 リユツクサツクで背負われたも芋の夢 同
 畫線へリジゴの艶の賣女めき 同

畫線の笠のほこりと税務員 同
 某に與ふ
 無抵抗お面一本くれてやる 同
 洗湯で泣かれみぢめな男親 長野縣柳
 脇かぢりへも金詰り響いて來 同
 紋付は訃報にばかり役立たれ 同
 子煩悩PTAにつけ込まれ 同
 アルバイト生きてく自信だけつゝあ 同
 あてられたのが満足で母帰り 兵庫縣齊
 褒めといつて後で苦言も聞かされる 同
 西尾からこつち大臣みくびられ 同
 大臣來たるそんな大臣あつたのか 同
 清貧を妻子も笑ふそれでよし 同
 たまにはいゝだろと帯持たされる 滋賀縣美
 聽診器奇麗な肌だなど思ひ 秋
 青白いとこだけ秀才型になり 同
 口だけは嫁きどうない娘ばかり集り 同
 スベツシャルサーピスとかのキス 同
 夜なべして稼げど秋の虫すだく 小松市茶
 公僕の自動車今日も路地へ折れ 同
 寄附帳にたつた千円ともみられ 同
 税務署に意地を通した店を閉す 同
 人の眼に止まるきりようで不倅せ 同
 看護婦さん人の名前に節をつけ 大阪府春
 血税と言へど税務署新築し 雄
 伴奏を置いてき放りのど自慢 同
 本伏せて子の声聞かん日曜日 同
 心臓が持たなかつたとけりをつけ 同
 停年の挨拶状は美文なり 岡山縣滿
 スポーツマン十一文の嫁が來る 年
 履歴書の入つた手紙を持て余し 同
 先代のちゃん／＼を着る年になり 同
 菌ぶらしを塩で使つて旅ごころ 同

謹賀新春

(柳人交歓ページ)

川 雜 東 京 支 部

川村好二郎
 宮田不
 山根白
 植田千
 植田東
 根岸東
 武田登
 加藤守
 石居高
 福田山
 客員
 櫻井

川 雜 美 作 支 部

弓 削 川 柳 社

丸山弓削平 直原湖月
 直原七面山 杉山孔明坊
 黒田笑泉 葛原秀鶴
 藤本満年 高山朗笑
 福島鉄兒 外一同
 家本風至 神目支部一同
 藤本茶々 加美支部一同
 黒田久米女

貧乏へ予算にはない兒が出来る 大牟田風浪
 稻刈を社用多忙とすつぽかす 同
 右側歩行ボリスの前で思ひ出し 同
 早合点嫉妬しただけ損だつた 同
 新婚のガラス戸紙がはつてある 同
 不治ではないと注射針さぶりさし 大阪市十四生
 泣くまでは好かぬ女と思つたが 同
 夢去りぬくじに競馬に競輪に 同
 ビアノ弾く指で作つた芋太し 同
 長まつ毛きびしく強き意地を秘め 大阪市葉光
 不幸に馴れてゐて幸福恐くなり 同
 徹夜する残業怒つた顔のまゝ 同
 人間性計る尺度の伸びぢぢみ 同
 鈍豆とライター伸よく秋の山 大阪市草右
 百舌鳥の声よそに裏虫風に揺れ 同
 宝くじ当つて急にホラがやみ 同
 生ものゝ様にアイロン這ひ廻り 同
 或時は渾名の一つ位欲し 愛媛縣曉明
 渡される包卵でござるます 同
 人は右車は左牛はどこ 同
 スコップにお前は下手と言われぢぢ 同
 まだ若い癖にとこゝも狭い門 熊本縣斗四翁
 税務署へ名門の名も貼り出され 同
 落選は嚴と予算に組んでゐた 同
 残業に慣れて氣丈な娘に育ち 同
 鏡台に寝巻姿もうつして見 尼崎市ちか子
 鏡台に購入券と判を入れ 同
 なめくじがこゝらも這ふた台所 同
 台所生薑しなびたまゝ残り 同
 商談へ心得料理ばつぽつ出 貝塚市一郎
 時計かたに置くまで飲まんでいゝものを 同
 御堂筋君と僕の靴が鳴る 同
 婦長さんやつぱり結婚してしまい 同
 宴会の時間遅れて塗り直し 貝塚市千舟

落籍されてお酒の酔も早うなり 同
 色街の相合傘は新派めき 同
 子の勉強湯川博士に刺戟され 同
 湯の町の朝日まぶしく苦笑ひ 東京都高志
 女給まで泣かせる程の腕になり 同
 童貞だなんておかしくつてどひやかされ 同
 服装が夜の女に口説かれる 同
 白粉の濃くなり女負けてゐる 大阪市志津
 君はまだ純情だよと不惑すぎ 同
 夢があり不遇のパンをぐつとかむ 同
 都会の嫁連れて小さな汽車でくる 同
 これからは友達ですわと涙ぐみ 大阪市夏六
 妻君がしつかりしてゐて鹹になり 同
 淋しいものにすゝきの眞盛り 同
 大いなる夢が社長の机拭き 同
 百姓は只春であり秋であり 岡山縣富至
 髭の伸びたも知らないで炭を焼き 同
 諸肌をぬいで電話の詫び口上 同
 藝口の軽ろさが尻を重くして 金沢市陽々
 吊し柿日に一つ消え二つ消え 同
 夜業迄させて月給待つてくれ 同
 家計赤字背中合せに寝て終ひ 大阪市五郎
 雨降ればおしめの下でめしにする 同
 女事務へ何の電話かよく笑ひ 同
 文化の日家がほしいと署名する 大阪府きはち
 委員会一言居士も名をつらね 同
 没落の見栄が葉巻をくゆらせる 同
 首判課長帰りを急いどり 今治市醉歩
 エブロンもたすきも伊達の十八九 同
 ほめられたお茶が続く賢母型 同
 恋も無く月に千鳥の曲を弾く 岡山縣苑女
 身投する様に熟柿の落ちて来る 同

<p>社柳端川</p> <p>鳥取市職人町 杉谷湖山 増田耕民 鳥取市川端三丁目 中島鉄州 鳥取市川端三丁目 電一、二六二</p>	<p>部支関下社誌雜柳川</p> <p>人同寺禪柳誹</p> <p>柳若の関馬るび伸とくすくす</p> <p>藤井米三翁 高橋かうたる 望月白陽子 西田不川 首藤千夢 加藤司人 内田茶楼 清水博美 多田はなみ 住沢紫蓮 今岡素生 藤田素人 岩崎勇記 中村九呂平 國弘半休門 半休改メ</p>	<p>部支イワハ社誌雜柳川</p> <p>社—ロイウ—</p> <p>古川麗花麗 藤井友郎 内藤草一郎 三輪晚翠 築山快夢起 村田流水 小田沙兆 市岡曉舟</p>
<p>川柳風見草吟社</p> <p>石川縣大聖寺町字福田 町五二 昭和印刷社方</p> <p>選々として作句を続けて居 ります (一同)</p>	<p>会師医区南</p> <p>會柳川部化文</p> <p>藤原虚水 中島生々庵 南捨舟 幸田一哲 長谷川迷路 富永藍田 木村藍田 河村瑞川 河村瑞川 浅野春路 羽柴葦丈子 加納まさし 黒木彈正</p>	<p>部柳川鉄電海南</p> <p>土井万年青 友淵貴山 阿形一杉 足立水鏡 山田烏莊 雪野博史 水本無人 宮尾技貞 菅尾信郎 森本黒天子</p>

育兒手帳歩ける頃で止めてあり 同
 ボケツトの中で岩波賣れて行き 三原市正 一
 ダイヂエストに上れば左派を悪く云ッ 同
 宿屋からスグカネオクレイサイフミ 同
 殺してはならぬ患者の心付 熊本市室 久
 千円札肌の温みも添へて出し 同
 避妊薬潜むと知らぬ荷宰領 同
 ぼんくらなボスは未來も生きんさし 大阪市文 雄
 秋の日に亡父の背廣の暖か味 同
 好き嫌いの多い娘が嫁ぎゆき 同
 妻揚子伊達に使つた年もあり 岡山縣秀 鶴
 あの膝を今夜は誰が枕にし 同
 乳臭い口で大人を黙らせる 同
 用あつて來たのへ有馬寒いどこ 大阪市朱 朗
 ロングスカート風孕して思想無し 同
 酒好きの今日もあぶれたブローカー 同
 村長を辞めても二号持ち続け 今治市一 風
 文化には遠く豊かな山の幸 同
 悟りとは氣にせぬことであるとい 同
 高島田もう半日を待つばかり 今治市バツト 同
 暴税に果物山を押へられ 同
 世話役の寄附の話へ酔ふたふり 同
 糟糠の妻あり野暮で通つて居 和歌山惠 風
 好きは好きですけど家も氣にかかり 同
 好きな妓が出来て官吏のなさけなし 同
 料理屋の酒料理屋の味で飲み 岡山縣娛旬樂 同
 年の暮そんな呑んでゐたかいな 同
 正月へどまれ一本買つて置き 同
 待つ膳へお冷だけでいゝと言ふ 岡山縣茶 々
 孫一人あるのに若いと言はれたく 同
 金づまりさいそくされぬをよ事 同
 飲めばすぐ女が欲しい齡になり 岡山縣鉄 兒
 仇つばい仕草女は癖さぬ氣 同

割勘の付が出勤待つて居り 同
 訓示より先に答辭が出来て居る 今治市文 庫
 逞ましい消化力だなあ諸の山 同
 溜息を子の本棚の前でつき 同
 宴会になつて署長のくだけ様 岡山縣牛 歩
 此の辺で止めどきしようど五角の碁 同
 教科書に落葉はさんでまだ純情 同
 日記帳今日も昨日も草を刈る 愛媛縣孤 峰
 冬帽をかむり直して風に出る 同
 集金を子供に留守とことわられ 同
 山彦もターザン調で應えて來 貝塚市幸 司
 ゴシップを新任地もう知つて居り 同
 此の料理ラジオで言つてた通りなの 同
 影うすし死の順番の來そうな子 今治市志 津
 ハイヒール杖がいらそな歩き方 同
 秋淋し柿の熟れるを待たづ過ぎ 同
 洗髪うちわの風も入れてやり 石川縣味 平
 眞似文けは人に取けない腕を持ち 同
 千円のチップは軽く渡される 同
 三味線に藝者の意地がちらと見え 石川縣茶撫期 同
 鮎釣りの竿だけ負けぬ長さなり 同
 お互におこる積りの喫茶店 同
 ご主人が出て來て強くなつたさげ 愛媛縣志 峰
 松並木続いて故郷の自慢なり 同
 日なたばこ蜻蛉が先に待つていた 岡山縣梯 梧
 祭の日やはり宝くちでも買つたらか 同
 國宝を道具屋らしい値をつける 東京都東 夢
 更生を三度も誓つて夜を行く 同
 日本の悲劇滞貨を着て歩き 石川縣光 郎
 石の門しばし失業撫でて見る 同
 刈りさられる一步手前の秋の色 香川縣迷観子 同
 死に度くないと散る一九 同
 信子の死

謹賀新春

(柳人交歓のページ)

高 鷲 亞 鈍
 大 西 野 介
 龜 山 晴 峯

特殊紙器工業株式会社
 大阪市阿倍野区晴明通一

川 雜 姫 路 支 部

白 鷺 川 柳 會
 姫 路 市 西 町 之 坪

夷 一 笑
 萩 原 二 葉
 西 垣 良 甫
 角 谷 凡 夫
 角 谷 凡 夫
 狩 野 燕 子
 岩 崎 樹 甫
 岩 崎 揚 甫
 木 下 和 水
 森 田 雪 美
 大 川 笑 鬼
 武 田 孤 笑

鳥ヶ辻同人

會長 尾崎方正
 相談役 市場波食子
 編集兼會計 水谷竹莊
 幹事 吉田斜水
 編集部 森下愛論
 同上 小沢史葉
 同上 西辻竹青
 同上 太田良子
 以上不朽洞會員
 池戸桃村
 木村晚成
 久保井柳太郎
 酒井純三郎
 田中耕人
 多田禿天
 津村神峰
 中谷葉菜子
 若林草右
 足立春雄
 上林平藏
 西川惠風
 井上博
 牛田晴夫

善人の証據反省ばかりして具塚市庸司
 病み呆けて顔も洗はぬ日がつゞき 同
 弱い子に暖くなれば涼しくなれば富山縣三
 復員が妻の洗濯眺めてゐる 同
 あの店は商賣仇税を聞き愛知縣吐
 姑も養子へ折れる年となり 同
 夕刊を賣る子へ時雨一しきり 大坂市柳
 若人の命あふれた競技場 同
 放送も終りその儘夢をみる 池田市木
 停電の時まで用のない男 同
 花札のように女が飛び乗つた 大坂市副
 風鈴も吊つたまんまに菊の窓 同
 會計の顔があかるい支拂日 布施市柏
 ほどくと実力の差の仕方なし 同
 もう氣兼ねしますもんかと妻五十堺 市太
 いゝ人も來ずに巡查に叱られる 同
 担ぎ屋のお蔭で柿も栗も食へ 今治市伶
 在宅を先づ確める垣根越 同
 猫の恋垣根で一才振り返り 今治市松
 言訳はもう添ひどげる外になし 同
 米の價を聞いて箸もつ町の客 岡山縣久米女
 夫の過去聞いたは一人産んでから 同
 轉勤の一度便りを呉れただけ 鳥取夕
 山陰の旅は電化のことにふれ 同
 無心状ながらも達筆父は賞め 岡山縣孔明坊
 新設の電話友から飲む話 同
 叱られて影と二人の淋しい子 大坂市一
 夕焼へ楽しい影がゆれて行く 同
 クリスマスでおぼえたダンスなり 飯路市和
 コーヒーをまたかきまはす話すき 同
 麻雀の電話早くも察せられ 滋賀縣敬
 アイロンをほり出した旅に立ち 同
 母さんによつぽど用のない野球 滋賀縣観
 月

散髮屋僕の番から飯にした 同
 脱穀機の音は四方をはばからず 滋賀縣和
 陳列をよく賣れそうにしてみたが 同
 人生をフツと疑ふ昨日今日 大坂市孤
 一應は天職と思ひ又迷ひ 同
 山水の床を背にして酔ひつづれ 鳥取縣遊
 もてあます若さ示すアロハシャツ 同
 おしやべりと無口でとなり仲よ 廣島縣愛
 終点で降りて山越す妻の里 同
 盆栽に水注ぐ日課は靴のまゝ 岡山縣千代男
 妻や子を背負ふ自覚を置き忘れ 同
 引揚げを告げるラジオへ針を置き 岡山縣朗
 裏切つた怨と被告申上げ 同
 新米が腹に持つとは羨まし 大牟田一
 朗かな訳が解つた娘の日記 同
 砂地踏む足も海辺の熱きなり 石川縣醉
 邪魔者にされて念佛あるばかり 同
 アベックで來た優越を海で知り 石川縣魯
 折靴廣告マツチがよく溜り 同
 見物に押され手踊り遠くなり 石川縣東代女
 マツチ箱貼つて引揚待つている 同
 警戒をするよに虫がなきやんだ 大坂市梅
 デパートの廣告妻と寒う見る 大坂府桃
 職場結婚互に楽しい日が続き 大坂市葉菜子
 千円札出來て行員減らされる 香川縣朝
 オフィスはニキビ一つでひやかされ 滋賀縣喜久江
 病み上りスマートになつても言はれ 滋賀縣幸
 アナウンサー人間性が缺けてゐる 滋賀縣斗
 首切りが越冬資金の返事にて 滋賀縣郁
 夫

<p>道頓堀川柳会 南区道頓堀角座前 電話三九九二</p>	<p>鳥取市東品治町六二番地 日ノ丸自動車株式会社内 川柳日の丸会 後援日ノ丸文化会</p>	<p>東京都港区芝南佐久間町 一ノ五二 高須啞三味 名古屋市中区幸樂町 二ノ一八 伊志田孝三郎</p>	
<p>川村伊呂 岡居金矢 岡村光一 平井木歌 荒川不修 田部梅子</p>	<p>静岡市中田町一ノ二〇 落合落瓢 協田梅子</p>	<p>東京都台東区豊住町十一 山路星文洞 白鷺川柳会</p>	<p>さつき川柳会 滋賀縣貴生川町三本柳十七 大鶴喜由外 職員同人 入所者同人</p>



秋春筆雜

リズムに対する考察

一字井無愁氏に
戸田古方

批評の結果進歩するのは定石です。私もそうした好運に恵まれたことをよまうとびつゝ左に
「近代文学としての川柳」を第一回として五回にわたつて川柳についての考え方並びに抱負を述べてきました。(まだ二回未発表)連続の形式をとらなかつたのはいささか不統一なところもあり、出来ればひとつひとつがまとまつた統一みものとなればと考へたからであります。したがつて雅台へのお答も九月号以外でふれたものがあります。例えば韻律の問題に關しては十月号の九頁五段九行目以下に簡單ではあります。述べておいたのです。九月号でも五七五のことぐらひは一言しておけばよかつた。とあとで氣附いたような次第です。もつとも十月号の私のリズムの取扱ひ方は「近代文学の特長」と「川柳に於ける近代性」のむすびつきの如く素論に終つてゐる

ことはみとめないわけではありませぬ。素論論といながらこれをあえて持ち出す理由は精確な議論では百年河清をまつ如く臆病に落ちこんでしまふかも知れません。學者でなく教師としての私の日常が啓蒙といふことに傾く結果、川柳の概念を把握してもらいたいと功を急いだためであるとも考へます。
だからといつて川柳は十七字の散文で詩でない、川柳が詩であると考えれば自縄自縛だといわれる御意見にはまだ承服いたしかねます。
詩は御説のように形式としての詩型と内容としての詩心をもたねばならぬこと、リズムという形式をもたず、詩心だけでは散文とえらぶところが無い、それはわかります。
だがリズムそのものにも又ほんとの形式的なもの内容を通じてのリズム、單なる聴覚によらないリズムもあることを考へるので、聴覚以外のリズムは朗詠などをする場合に全く不適当だ、というたものは非音楽的なるが故にリズムと称しがたいとでもいわれるのでしようか。

私は絵がすぎて子供の頃から音楽の方は素養が少いので、耳の訓練もとほしく、リズムというような問題も映画のモンタージュに見るような視覚的なものを考へ勝ちなものです。絵画の構図や色彩の上からみられるリズムに魅力を感じてゐるのです。したがつて御説にもあつた如く古今集が韻律を追ひすぎるあまり言葉の遊戯になつてゐるというふうなことは全く同感でむしろさうした外形的な聴覚的リズムの意識的な駆使には賛成しかれるのです。
日本人が一般に考へる韻律、韻文といふのは七五調だけでないでしようか。十七音字詩が五七五を標準としてゐることは路郎師が新川柳講座十七頁一二十三頁に分類してゐられる八九型、九八型、六七五型、五八五型、七七五型、五七七型などの区切り方も、時に破調はあつても基礎はみな五七五の調子から出てゐます。字あまりや字たらずになるのは作家の呼吸の長短に關係してゐます。一句形成の必然から生れた音楽的なリズムであり、それは同時に内容的にもふれてゐるのです。大ていは無意識のうちに生れてくるもので、その限りに形式的なリズムを期待すればいいのでないかと思つてゐます。無愁氏の引例にもあつた韻、脚韻、
かれ枝にからすのとまりけり秋のくれ
いま出た海女のあらひ鼻いき
なども意識がどの程度まではたらいていたか古人の俳句過程の研究をしてゐませんので御教示願ひたいと思つてゐます。
又短歌を五七五七七に切つて示して下さいましたが、五七五の川柳、俳句、さては武玉川の七七と

大阪そごう

そごう卸商品館
十合商事株式会社
南區土佐場一丁目
そごう灘波店
地下線ナンバ駅上階

そごう梅田食品市場
大阪驛東隣
そごうアベノ店
上町線終點前
そごう更生デポー
大阪驛前

いつたものが要するに日本詩のリズムであり、七五調のみを考へればそれで充分ではないでしようか。この辺のところを御理解いたいて内容的、視覚的、リズム及び七五調を以つて川柳に韻律であることを認めてゐるのではないでしようか。内容的リズム形成の要素、対称、比較、反復などについては十月号十頁十一頁に引例いたしました通りであります。これは古川柳についてもいえることであると思います。
洋館に先祖の槍のおきごころ
豆 秋
おさへればすゝきはなせばせきり
古川柳
一九四九・一一・一六
ぎりす

謹賀新春 (柳人交歓のページ)	西尾 葉 大阪府中河内郡 曙川村八尾木	木村孤浪 平塚市馬入二九〇九	西垣 錦風 奈良縣生駒郡伏見村 字菅原九〇番地	柳樽戦後版 (一) 吉田 水車 名作は常に不朽と言うが柳樽の 作品中現代に脈打つものもすくなく	清水白柳子 天王寺区宰相山町一四七	戸田古方 池田市井口堂一六四
--------------------	---------------------------	-------------------	-------------------------------	--	----------------------	-------------------

くない、今柳のそのこゝからひろつてアブレゲル版として見た

帯刀で紙くすをける見苦しさ

(十) — 柳の篤意、

今はもうそんな浅ましい姿は見

受けなくなつたよだが三分の二

位の長さで捨てられたタバコの廻

りを旋回したものである。たゞし

モク屋は踏みじられた喫いがら

さえいまだに捨て居るが。

凡俗に寺をとられる秋の末

(十二)

住みにくい世の嵐はお寺さん方

へ、吹いて近頃お寺を旅館料亭に

轉向する計画に取締当局を面喰は

せて居る。

たゞこ屋の女房血どめ程まける

(十四)

きざみの計り賣りは昭和の世に

再現した配給と言う名で。

片言をいい／＼おぢしがるな

り

何もかも自由それもあゝ迄無責

任な自由、殊に恋愛は脱線の尤な

るものがある。たゞなめる親にし

ても、時代の新語の一つ位しやべ

らないといよ／＼なめられる。

今時の姿は金を見て笑い

(十四)

は痛い程通用する。

降参が済むと一度にひだるがり

(同)

敗戦日本も実にその通りであつ

たが、もう古い事は思うまい。

聞いてくりや命があると云うば

かり

(同)

年貢とはこわいものだと思

い、の句と共によ味はつていた

とき度い。

一の富ごこかのものが取りは取

り

(十五)

たてえ百万四のが三本か五本で

もあるにはちがいないのだから

そではないのだけれ共、してやら

れるとは知りながらすきな煙草を

ギセイにして買うのもあほらしい

夢があるからだ。

川柳と私

布哇 並木東田楼

「私は近頃川柳を始めましたよ」

と或る人に言つたら「ハッハッハ

ッ、そりや結構、川柳は面白いで

すよ、誰にでも解つて、第一作句

する事もやさしいし——ハッハ

ッハ——と笑はれたのには私は嘲

私は何も日本一の「川柳雑誌」

誌上で今更川柳の功德を釈迦に説

法する気持は毫厘ありませんが、

私は人生詩として川柳は結構な

もの、は決して他に求むる事は出来

ないと思つてあります。吾々は

人生問題を離れては自然と宗教も

ありません。自然詩を上品だなん

かと有難がる御連中は恐らく人間

離れのしたエライ方々であります

。私は宗教の信仰を持つて居

ります。だが信仰と申しましても

悟りと言つても、結局私達は平凡

なる人間の行路を毎日トボ／＼と

歩む者であります。この人生行路

こそ、私達人間の唯一無二の大切

なる花道であります。

私達が人生問題を深く味えれば味

うほど、それに正比例して川柳の

興味も彌が上に深くなるのは当然

であります。ところが困る事には

川柳は作句するのの中々むづかし

いのである。私のやうな初心者

はどうしてもソラテスカ川柳や説明

川柳へ落込んでしまします。例え

ば私が「ソロバン」といふ課題を

得たとすると、私は早速やりませ

ね、ソロバンは軽便でいゝ計算器

短信

久米 雄生

現岡山駅長乗越光太郎氏(号天

竜)と僕とはやはり川柳につなが

る縁で昭和十二年以来の交際とし

たが、この度天竜氏に仕へること

になりました。この間から駅長の

發案で、待合室に旅の句を貼ろう

ではないかということになり、練

習用の短冊に天竜、久米雄書くと

ころの旅の句が、せらりと二十枚

程ならびました。これが評判にな

り、いつも三人や四人が首をかじ

げたり、うなづいたりしてをりま

す。地方の新聞にも載つた位で

す。そして篤志家は短歌でも俳句

でも何でも駅長宛に送つて下さい

と書いておきますと、二三日前に

大阪の人から俳句が七句程届きま

した。

旅情を慰めると共に旅行を誘う

のが目的なのです。

——社の黒板——

新泰廣告へ乗選れた方は大急ぎ

で寒中見舞へ願いたし

ピヤホール

みどり

上六交叉点角西北

島 蓑 彦 作

大阪市住吉区丸山莊園

電天下茶屋③三七一〇番

大阪市南区糺屋町四十五番地

日本樂器製造株式会社大阪支店

西 村 松 夢 裡

生活の幸あり箸の一深

上 野 錦 水

石川縣小松市本折町(電五八)

小女郎吟社

在 間 小 楼

新居浜市若水町若水莊内

八代市北之丸宮崎醫院方

西 野 斗 四 翁

香川縣大川郡白鳥村大字

漢五二五 藥 局

松 村 迷 観 子

川雜篠山支部

小 島 無 聖

小 林 指 月

田 代 尋 四

家 沢 薺 花

小 西 無 鬼

阿倍野区天王寺町三〇七一

岸男前製造所

南 柳

奈良縣郡山町柳一丁目

菓子商 上田 宇 都 羅



四世 眠亭賤丸 (中)

富士野 鞍馬

文日堂礫川の後援で江戸前句界に覇を示してきた眠亭賤丸は、遂に川柳四世を継ぐことになり、文政七年九月十二日に河内屋の大廣間で、その立机披露大会を催し、朝からはじまり徹夜して翌朝まで披露が続いたといふ大盛會であつた。時に四十七才であつた。

その大会の入選句が柳多留八十二、八十三編となり、當時の有名な作者柳亭種彦が兩編の序文を書いて四世を讃えてゐる。

「こゝに酒あり柳柳に漑たり、彼鬼貫が伊丹のかる口に勝るは新川ならぬ淺草新堀川柳が醸して、世の人に漑を流させしよりこのたのみにして酒造の事を誑ぐ者三世にして酒造の事を誑ぐ。今眠亭賤丸よく其術に長たり、ゆゑに樽次底深におよらぬすき人等賤丸をすゝめて四代の杜氏川柳とあふき、河内屋が奥藏に名びらきの鑑をまうく、集る句は一万に余り、數百人の連衆高樓に居流れたり。干時文政甲申秋九月十二日の曉天いまだ星の消えざるに、開口文台に向ひ、樂評、加評の數卷を披露

し、日没を燭に次ぎ、とかくして川柳が選る巻を吟じをはる頃は、十三日の朝鳥東天に輝けり、嗚呼この道の廣き事武藏野にや比すべきびつくり丸にや響ふべき。若し小原のせびき心もて蜂竜のさし合をいふ者あらば、罌壺三杯を盛らんと、新連の荒走り、木卯と替名せしえせ作者種彦、順の舞にうかれ出醉中に漫書す」

八十三編序

「此編は四代目川柳名びらき大会の続なり。大序を見ざれば二冊目の筋が分らず、味噌吸物で腹をこしらへば海沙(ウシホ)のうまみの知れぬ類にて、前編を求めたまはれば流行の筋が分らず、風雅のうまみが知れぬなるべし。ゆゑに八十二編に三編を次ぐ狂言の大意を見、かけつけ三盃の未練をいはず、初よりばうだらになり給へと柳柳の口をひねつてつぐ一木卯」

又文日堂は同編の奥書に

「柄井川柳世を辭してよりの名を継げりといへども、句々を判するにいたりては、一流の滑稽、幽妙を失ふに似たり。たとへば盲人の象を探りて、足を撫ては

種彦、礫川の二人とも最大の讃辭を發表してゐるところより察するに、賤丸の四世川柳繼承に就ては、この二人が強く推薦して公認せしめたものと見られ、江戸泰平の中で前句界は未曾有の盛況を顯現したのであつた。

(礫川)

それからの四世は選評ばかりで普通の作句はしてゐないが、各編の軸吟を拾つてみると次のような句がある。

- (九〇) うなだれて柳も縁の手向水 (九五) 身のめうが沖に溢るゝ人の波 (一一〇) 世にめづる花も常なき風に散り (一一〇六) いのれただ水にも月のかげ深し (一一一) 萬鶴の千代田に群れる身のほまれ (一一五) 錦手で波まん古郷へ旅戻り (一一二)

- 信あれば徳あり守護に依估はなし (一一三) 仰ぎ見よ神の恵みの彌高し (一一二) 仰げ唯神慮は人の非も鎮めし (一一三) 月雪は物教ならじ花の江戸 (一一四) 淨不淨わいだめはなし月の照 (一一六) 産湯から洗ひはじめよ玉の水 (一一七) 清濁をへだて守る神の慈悲 (一一九) 降る雪に枯れたる木々も花と見む (一二三) 伏して見ん宮居を照らす秋の月 (一二四) 不拍子の神慮に叶ふ午祭り (一五〇) 仰げ唯廣き恵みぞ神こゝろ (一六〇) 諸鳥みな眞似ても出来ぬ鶴の声 (二四別)

柳多留に見える軸吟は奉額の句が多い所爲でもあるが、神徳をたたえた、さつぱり味のない、シカツメらしい句が多い。こんな句を詠まねば宗家らしくないといふのであつたかも知れない。

四世立机の後、二世眠亭賤丸を継いだ人があるが、それは肉親か門弟か審かでない、そして間もなく亡くなつて、文政八年四月二十八日にその追善を武藏野会で風松が営んでゐる。その時に四世は前記の「わくら葉」の句を詠んだのであつた。

山之内 定剤注射 アークレミン 山之内製薬 血管アウトホルモンとアミン塩類

文政九年八月二十八日には風松の主催で、向島建碑末廣大会があり、柳多留の版元二代目星運堂菅子は次のように述べてゐる。 「爲に狂句の元祖川柳翁は寛政二のたし故人となれり。二代三代之間に俳風を催すといへども事ならず、今四代川柳叟の時に至りて、此道の連中打寄り、向島なる木母寺の境庭に創立せり、嗚呼川柳翁の末々廣々なる事奇々妙々也。故にこたび諸連の物評を乞ひ大会を催し、其集る九十七編と題し、余れる句を八、九、百と四つにわけたる。とどむ。文政十亥とし冬の日に菅子は初代川柳を「狂句の元祖」といつてゐるところ、注意を要する。そしてこの句碑

には「東都俳風狂句元祖、四世川柳」とあり

心にも上下着せん今朝の春

川柳

の句が刻まれてゐる。

文政十一年の百一編には、七代目三升が序文を書き「今こゝに四代つゞきし先生」と四世を賞してゐる。百三編には四世自ら序文を書き

「やまと歌はあめつちひらけはじまりてより、八雲たつの昔を

今もてはやす事になんありける。いでやこの狂句てふ物は、その庇をかりて雨宿りをするにひとし。しかばあれど世の中のあなを穿ちて、つれなきをなぐさむるは、このみちのいきほなるべし。人間わづか五十年、たゞに世をおはらんよりは、はらをかへてめと口に福の神を招くにじかじと、柳権百三編目の巻のはじめに作るものは俳風狂句の四世の川柳なりけり」

文政十一子とよまひの口

向島建碑とこの序文で「狂句」

無理失理に父の代理に坐らされ代理でんれんわ初めから餘を避け代理ですと遊遊買つて行き代理ともでないと言はつて来る

といふ称呼がハッキリしたのであつた。文政十二年丑六月鳥越明神奉額に、柳亭の選たち花を氏子にほしき御神体

川柳

とあるのは四世の句で、柳権を通じて宗家が選をうけるといふことはないのであるが、四世が柳亭種彦に敬意を持つてゐたので、空前絶後のこの一句があるのであろう。



大鶴喜由選 代理 吟題 課

代理人同志結局まとまらずおやこゝが代理店かと軒の隅先方の娘に代理見込まれるそう傳えませうと代理軽く聞き代理なきよこして話もつれなき來賓が代理ばかりで物足らず立ち退きの話代理のボスが来る代理ではあかんと言ふ風邪を引き出さぬ飲むだけで済む代理を引き受けた酒のない席は代理をやつて置き母の代理何も云はないおちよは口PTA母の代理がよく喋り代理では話にならぬ話なり代理と声を落して附け添える見合までしたのに代理でこわら義理固い母が代理を危なかりゴマ益に交る代理のつややかさいと聲があるので代理に使われる或る時は亡父に代る子への鞭代理役無事に勤めて見い出されかけがえのない長男に病みつかれ兎も角も代理を出して打診する催促も代理あつさり丸められ野心満々代理買つて出る

小	醉	弓削	翠	苑	華	鉄	同	十三	愛	文	葉	秋	青	梅	吐	草	山	好	千	ト	太	孤	芳	
歩	歩	平	柳	女	水	兒	思	論	雄	雄	光	男	男	子	平	右	南	郎	占	占	路	舟	泉	
無理失理に父の代理に坐らされ	代理でんれんわ初めから餘を避け	代理ですと遊遊買つて行き	代理ともでないと言はつて来る	上席へ代理は浅く掛ける	佳。大臣賞持つて代理の代理が来る	佳。賛成の多物に代理へばりつき	佳。折詰と代理酔はずに帰つて来	佳。代理人敢居を越えて気がくちけ	佳。女房が代つて行けば掛が寄り	佳。母親のことづつて半分程忘れ	佳。上々の出来る代理が笑つて来	佳。代理人折れる所を知らずにあ	佳。手強いと見える代理に綱が出来	佳。代診は丁寧に診てあなられ	佳。家中のあやまる役は母が受け	佳。課題の作句境地在に例える	佳。心 微頭敬尾主題が焦点	佳。心 遠くの焦点より主題へ	佳。求 主題が焦点で遠くへ	佳。中間帯 主題の焦点へブラ主題	佳。周 焦点は周にあり鰻屋の角位に主	佳。題を匂はす。この題でもそれが	佳。言へると思ふ。私は田周の句も	佳。作つて見たい。

選者

動 静 (其一)

▼本社忘年川柳会は十二月三日午後五時半から大宮文化会館三階で賑々しく開催され、閉会後不朽洞会の忘年宴があり、微を盡した。

▼川維大阪南支部忘年句会は十二月十七日午後六時から阿倍王子神社で開催▼南海電鉄川柳会は十二月十四日午後四時半から同社休養室で開催▼大阪通信病院忘年川柳会は十二月十五日午後二時から三階図書室で開催

▼南区医師会文化部忘年川柳会は十二月廿日午後五時から北極星二階で開催▼関西配電川柳会は十二月廿二日午後一時から同社九階で開催▼短冊を書き稽古の会は十二月十日午後二時から川維難波連絡所で開催

▼以上何れも路郎主幹出席▼川維ハワイ支部では十一月廿七日本年最終の句会を会議所楼上で開催

▼川維岡山支部句会は十一月例会を十九日に岡山弘済会ハウスで開催した盛會

▼川維美作支部忘年句会は十二月十日弓削町笑泉居で開催

▼長門赤紅葉狩と吟行(下関)が十一月十三日に下関駅長主催で開催された▼胡子神社祭礼句会(吳市)が十一月廿日に開催された▼川維岡山支部、川維美作支部対

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に...

ノルモザン錠

45錠入

大阪・武田薬品工業株式会社

一番御利益の高い

大丸の商品券

井戸より五千円までの
八種類ございます
京阪神三店共通

大丸

大阪心齋橋

一階

抗試合の第一回岡山支部提出の課題は「父」であつたが、その第二回美作支部提出の課題は「炬燵」

▼川維美作支部岡山縣では川柳町川柳村運動のため十一月十九日夜、弓削町から三里離れた加美町の分会設立句会へ自轉車で大挙出席された。

▼藤本潤年氏は(川維美作支部同人)岡山の渡田久米雄榎本聰夢の阿氏と十一月廿五日午後八時、岡山放送局から川柳「野金」を放送された▼村田周魚氏(東京都)還暦句会が十一月六日午後一時小野照神社で開催された

▼麻生路郎氏は十二月十七日七時十五分大阪放送局から川柳家の綱た歳末雑感を放送。

いのちある句を創れ



投稿清規
用紙は原稿用紙
文字を正
開催月日及場所記入
切毎月廿五日
投稿先本社宛

市民川柳大會 (大阪)

市民文化祭に参加した市民川柳大會は
市教育委員会からもその盛況振りを感謝
された。左記は十一月十三日大丸水曜ク
ラブの会場で発表された兼題「タイブラ
イター」の入選句、選者は我社の水谷鮎
美氏。他は誌面の都合上省略。

不氣嫌でうてはタイブの字もゆがみ
タイブライター赤字だけせせせせしく
菊活けてタイブに朝の油さす
二代目の知性がタイブ店に置き
採用の通知タイブではつつきり来
手紙打つタイブに暇な陽があたり
エヤメルタイブに暇に打つてくる
タイブ打つびびき机のパラが割れ
PXでタイブを打つてクルージュ
追れてもタイブ一字づつか打てや
逢ひ疲れおかしタイブ打ち遣え
劣基法ガチャリタイブの音が打ち
タイビスト社長へお尻向せやち
しがみつく様にタイブ二十八
読まなく社長のタイブしかも急ぎ
貿易へタイブも快調らしい音
恋しきにタイブはよこ途切れ勝ち
秋陽窓涉外局のタイブなる
誤字一つ見つけタイブは誤直し
タイブタイブ朝の空気がびんごれ
菊に視野まきタイブの字足らず
タイブでは愛の言葉の字は足らず
晝休みタイブは紙を喰つたまゝ
タイブ打つ指先き早い冬を知る

上役の趣味をタイブに打たされる
指を見ているとタイブも生きている
タイブライターほんご社長また未決
男には頼らぬタイブライター打つ
師を囲む寺の由緒も書くタイブ
タイブするまでこぎつけた報告書
きつらとタイブで賞意に副いながら
タイブライターの誤字の通りうち
繁昌はタイブの部屋に灯をさし
マンハッタンへ響くはタイブ打つ
印字機を酷使する日の儲け高
筆くせにタイブライター音がら
英文が読めて四十のタイブ室
恋文はペンでしたむタイビスト
タイブカバー冠つたまで金詰り
市長賞入選句
無雑作に機密書類もタイブされ
志 津

東京支部句會 (東京都)

十月十五日 於 島野寮
差向ひ・次の間・ハガキ・未亡人・
責任・障子
差向ひものも言へずに三日過ぎ
アパトとはまだよ言はぬ差向ひ
あなたとはまだよ言はぬ差向ひ
差向ひ彼岸櫻は窓の外
差向ひ月夜に遠慮の窓を閉ぢ
近頃はおやせになつた差向ひ
このまゝで続いてほしい差向ひ
トリツクの相談もする差向ひ
差向ひ月に遠慮の窓を閉ぢ
今日からは他人ではない差向ひ
差向ひ寝てから話すことにする
おビールなら少し頂く差向ひ
差向ひふれてはならぬ年につれ
次の間はキトクを打電する決め
次の間に聞えますよと女中逃げ
次の間が付いて一けた上りなり
御つづり仲宿眼で指す次の部屋
次の間は葬儀委員が出来上り
二階貸し次の間も貸しを食へず
只数行の葉書に父の愛を隣む

大阪南支部笠置吟行

十一月廿日 於 亞鈍居
再婚・投資り・谷川
再婚の話へ外は雪の音
再婚の話へ女あみつづけ
再婚は結局若いのを貰ひ
再婚へ先づ酒席をきいて貰ひ
再婚の話は打算的となり
引揚て来て再婚の妻に逢ひ
再婚をこゝろわり師匠に生き
再婚をすゝめられてる手内職
再婚の涙ぐむものも当座だけ
再婚の話茶ばしらたつてある
再婚へ不足あるかときいてやり
再婚へさつちつかの返事をし
再婚へさつちつかの返事をし
再婚の眠ににくらしいふこころ手
投資りの眠ににくらしいふこころ手
投資りをきたないものやうに選り
投資りに店先を貸し面白し
投資りの金庫片足かけて賣り
投資りの後から見る金詰り
投資りへ彼氏が居るので買をよ
投資りはじやべり疲れて銭をばら
投資りのトップ切つたはサククラなり
投資りのこんな田舎へきてるなり

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN
大和市東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワペン
タチカワセム
タチカワ画紙

投資りは血の出るやうな声を立て
投資りへやつぱり儲ける氣で座り
税務署の方をにらんで投資りし
アドルムを飲む谷川の水を汲み
谷川の水いそがしくいそがしく
谷川に笹舟一度もうたきり
急流の岩の出鼻へ手を貸され
谷川を紅く染める笠置なり
谷川のカンパス霧がふりかゝり
谷川の白さへ淡もごころ冬の音
谷川に向ふ遊覧バスがゆれ
谷川が小さく見える小屋に着き
谷川の岩でほろ酔さまして来
谷川でマツチ名所を知り
吊橋のこゝから名所と云ふ紅葉
谷川のこゝから名所と云ふ紅葉
谷川の音が床下くぐる宿
谷川のひともこぬの住む青さ
地間に谷川へ出るハイキング
谷川を海のやうだと子雀ら
谷川へ出て死場所が見附からず
谷川の底知つている蟹が見え
谷川におすしの折が流れて
谷川の大きな岩の上で呑み
谷川でしばしばし世の山岳部

谷川を見下す宿でばられたり 野介
瀧山の紅葉くの字に川は縊ひ

川 美作支部創立句會

十月九日 於 弓削小学校講堂

丸山弓削平報
疎・慾情・声・肌・握手

駅前親類があり傘を借り 鮎美
ついで来た丈駅前で帰される 瀧年
山の町駅の前だけ暮れたい 淑郎
駅前真正面に佐分利信 孔明坊
駅前買った雨傘もつ破れ 富至
バスガール駅前もパツと降り 婁句樂
駅前へジョブ一直線に来る 弓削平
駅前に住んで、汽車に乗り遅れ 香風
世をすれた子供駅前根城にし 秀鶴
駅前へ巡查と闇師交互に来 路郎
駅前前で急がないのが古木屋 同
水臭い米を友達もつて来る 祝平
一粒の米よく見れば影を持ち 鮎美
そこばくの米が賽銭箱で朽ち 牛歩
ごん底に住み松茸の香を愛す 白柳子
繩一筋張れば松茸山になり 一挙
父だけの鵜松茸へ酔をきかせ 呑峰
一本の茸は五人の腕にゆき 鉄々
松茸をみつつけそうへ付い浮き 茶々
二人して買ふことにした避妊薬 緑雨
避妊薬知らぬ薬局まで買ひにいき 騒人
あざけなく聞かれて困る避妊薬 泉
ホケットの避妊薬から事がバレ 笑兒
親と子が別々に買ふ避妊薬 鉄兒
避妊薬草笥の中に入れて遣り 高良
我が暮しだけ生みませう避妊薬 天峰
避妊薬使つてゐない顔で聞き 弓削平
家計簿に薬とつけた避妊薬 同
眞直ぐに來て避妊薬買ふて去に 北星
避妊薬不安のうちを淋しがら 祝平
避妊薬男あつさり買うて去に 蟻峯
久米雄

アレを買つて帰れと亭主頼まる 那岐坊
長女だけ知つてる母の避妊薬 吞狂
わが一言に通訳しやべりたて 閑
通訳が来て値切られるのが判り 正一
通訳になつて五人が食つて行け 湖月
通訳を呼びに行きますだけ云へ 久米雄
通訳にすゝめられる京の酒 八歩
通訳を介して喧嘩間が抜ける 瀧年
宴会が果て、通訳れきらわれ 喜宝亭
鸚鵡の様に通訳日を暮し 喜宝亭
「と云ふ訳です」と通訳茶をこし 喜宝亭
通訳の腹で言葉と和らげる 喜宝亭
了解がつかない通訳邪魔になり 喜宝亭
通訳を辞めて無口人になり 弓削平
襖の絵見あきた客の生欠伸 宵果
會計は襖の蔭へ二度呼ばれ 宵紅
襖越し肝心のとき、逃し 一子
甲上も丙も襖に貼つてあり 吉備平
見合ひの手襖へかゝる顔になり 同
病室の襖見舞の籠を置き 久米雄
許す氣で居るのに襖を入らぬ子 青紅
塚を切る涙は襖閉めてから 弓削平
火の様な唇でした星の下 茶々
慾情もこのパイアルに押へられ 雨村
慾情へ女の言葉さきい過ぎ 祝平
慾情へ四十のこわを考へず 久米雄
慾情のそれを知らない乙女の瞳 湖月
襟足は男の無理をきく積り 青紅
病床の妻慾情の眼をさける 祝平
慾情を知性一つの灯に座り 祝平
記念写真何へ二人振向かず 婁句樂
敗戦記念片足ないのなり 同人
記念品受けてつめ腹切らなれ 喜宝亭
モシ、と丈でて捲入直ぐに知れ 高良
た、き賣りもう切捨てる声さなり 八歩
声だけは、が訛りて落第し 瀧年
論とされたとたん泣声高くなり 日出雄
主張する声はあまりに弱過ぎる 一歩
花嫁さんあるかなきかの声です 白鳳
一微な声へお米が切れてゐる 青紅
秋祭大阪弁の娘が戻り 八歩
凡々

川 竹原支部句會(廣島縣)

十月十五日 於 葉留路居 弘津柳慶報

長袖の出来ぬに祭明日となり 高良
客も來ぬ祭で酒を持てあまし 正一
長男に役がついてる村祭 久米雄
鶏の命へ祭り近くなり 祝平
旅心しかと財布を肌へ付け 湖月
肌下しと泌み入る襟に月は冴へ 老骨
誘惑に勝つて素肌の未亡人 照子
やは肌を思い水蜜喰べ終り 久米雄
苦勞をさせといってきた肌だ 茶々
ホスターに男の肌は盛り上り 祝平
アプレゲール肌に入器ある女 白柳子
按摩今日僕の心にふれて採み 風來子
帯農したたくまじしに握手され 笑兒
懇請を入れた大きな手の温み 久米女
見くびつた相手に軽く握手する 弓削平
黙つてる握手心に通ふもの 祝平

宿題は消ゴムばかり使つてゐる 愛鳩
消ゴムの角をなくした子の写生 芳郎
消ゴムの跡を噛み難問のまだ解けず 愛鳩
消ゴムの跡へ絵の具の落ち付かず 芳泉
二つ目の眼で落ち合ふこととする 同
駅前の店を見飽きる時間待ち 愛鳩

久賀支部句會(山口縣)
八月十八日 於 不二クラブ 岡村路三報

忍ぶ・たんす・けむり
忍ぶ身たなごと山科派手に酔ひ 古山
忍ぶなんて昔の恋も御堂筋 浦東
たんす長持子供も連れて帰つて來 同
連れそうた永まタンスの古はける 水郷
妻の留守旧田が出た小抽出 浦東
焼香の煙へ寡婦の艶すぎる 路三
処女妻というエプロンの白さなり 朗々
借金を平氣で話せる金が出來 浦東
九月十八日 於 不二クラブ

とうふ・あご
安直なものにさされてる冷奴 猪太郎
生きて居る様にとうふはあつかわれ 櫻三
尺八はあごを振られれば出ぬ音色 櫻三坊

川 岡山支部句會(岡山縣)
九月十日 於 岡山駅弘済会二階 拔声機・嘯・姐・役人・ラツシユア

版 寫 膽 田 阪
二五町田芝区北市阪大
会 商 田 阪 式 社 株
番九三六一 島福 話電

ワ・黒子

名士講演入歯の動く拡声機
 拡声機誰の声か知つておれ
 夜のしめり帯びたマイクの声は
 空腹へいきなり近く拡声機
 拡声機社長の好きな訓示なり
 よ、見れば足がふるへた拡声機
 拡声機喘みつきそうに顔が立ち
 嘘ばかりでもないし儲り
 嘘つきに來た塵埃間明るす
 嘘の世へ今日もちびてる靴をはき
 人生の嘘が巡查に書とられ
 姐は母に委せる目出たい日
 一日をたいて暮すがまぼこ屋
 姐もくぼみ女房も世帯じみ
 姐のまんまで西瓜分けて食べ
 姐のめはキユウリと言ふリズム
 まな板に四角はつてる男の手
 姐に愛情別な音を立て
 まないたにその日暮しが刻まれる
 役人で顔だけ廣い父なりき
 役人のメンツ少うし待たしとけ
 お得所の無駄を役人知つて居り
 卷舌へ役人腰が浮きかゝり
 役人の認印一つが拜まれる
 ラツシユアワ成程人の多い國
 ラツシユアワ愛する人の手が當り
 ラツシユアワ新聞賣子に釣がなし
 この黒子男四五人泣かして來

下關支部句會(下関)

十月七日

於半休門居

傘・嘘・月
 傘と傘かさなりあつて立話
 さじけた傘を待たしと腹のつる
 傘と傘傘傘今日もさみだる
 絵日傘の顔を見る氣の急き足
 居残りの知らずに駅で傘は待ち
 父を信じてコウモリ待つ暮の駅
 上品な嘘袂を一寸当て

九呂平
 半休門
 米三
 同
 十字星
 九呂平
 紫蓮

そら風邪だ嘘だ等と大事がり
 嘘したと云うので嫁が叱られる
 嘘出てから木炭をつぎええ
 温泉宿湯の氣のさめた嘘めなり
 正道に還れと月が澄んでいる

八代支部句會(熊本)

十月 佐野ト占報

支店長・理窟・口笛・対面交通
 本店の他は恐れぬ支店長
 支店長停年制が待つてゐる
 支店長留守へお茶屋の請求書
 この上は子供がほしい支店長
 なぐられる迄は女房の方が勝ち
 一理窟これて今日迄平社員
 口笛へ女黙つてついで來る
 その先をばかす口笛吹いてゐる
 対面交通借りのあるあがつて來る
 右右右早い流れのアスファルト
 阿側の店あべこべに覗き出し

大牟田支部句會(大牟田市)

十一月 於三池染料保安課

富田一葉報
 思立ち・障子の穴・早合点・口答へ
 酒好きは又呑めること思ひ立ち
 子算では儲かる豚を飼つて見る
 よい思ひ立ちではあるが金要る
 はえは立って障子の穴の数かふへ
 口論が障子の穴を往來する
 眼の塵を取るを接吻だと思ひ
 安賣へ早合点の衍進ひ
 早合点通行人が叩かれる
 早合点嫉妬したとけ損だつた
 俺に似て口答へする子を案じ
 口答へする子を追つた火吹竹
 口答へ子よりも妻が叱られる

柳城
 修
 修
 同
 同
 抱逸
 葉
 治
 水

オーパー

給料日所得税さへなかつたら
 儲けてくるくせに税金滞納し
 税金も最低と云ふ家に住み
 泣き事を鼻であしらふ税官吏
 流行歌ならして納税パスが行く
 ワンセント見事に當てた時の人
 稼働して立ちまききのはいつて來
 移動前校長室を立ちまききし
 一番なりは先づ孫達に送りつけ
 小包に思ひ出多い家の柿
 四苦八苦しオーパーが出来て來
 合オーパーせいいたくたつきあり
 おさがりオーパーで今年も過す氣か

日立櫻島支部句會(大阪)

稲葉鳩花報

ガス・年頃・サイレン・花嫁・亀
 見かぎつた浮世をガスで死ぬつり
 花言葉教へて呉れる歳になり
 男勝りにされて年頃盡にられ
 サイレンに安治川の船盡にされ
 白浜へ來て花嫁は風邪をひき
 花嫁は十九理想を日々崩す
 秋風に危あるかせてアルバイト
 銭亀へもやがめば街の灯がまじし
 下積の亀が動いた秋日和
 甲羅千す亀へトンボがとまに來

ウイロー社句會(ハワイ)

九月二十五日 於商工会議所

古川麗花麗報
 人の道ごうやら踏んで來た誇
 備くにありと凡夫の道をきめ
 恋も道と説く身を淋しがかり
 別れ道虫の音またもしきり
 正道を歩めば道人扱ひし
 半世紀平々凡々道に活く
 日は落ちて茨の道を一入行く
 道端の犬まで俺を馬鹿にする
 畦道を算へるように蜻蛉飛び
 飛行機の道があり我が家根の上

此の道はたつた一軒で行き止り

日本に皇道があり民安らか
 藝道に生くる師匠の入道落ち
 月の道山迫り來るまだ言へず
 眞直ぐな道と母は道を知る
 轉ばすに行けよと母は道に立ち
 閑屋から生活の道を説かれたり
 かまきりばかまきり活る道がある
 人の世の道と爺かんこなり
 別荘地道は遠いが近くある

日ノ丸句會(鳥取)

八月十九日 於工場事務所

河村日濤子報
 薬・子供
 折りたむ心もしづか薬紙
 惚れて通ふ人とこも知つて
 九月二十九日 於工場事務所
 寄附帳に先祖の墓し偲ばる
 宝くじ寄附の時より買って見た
 寄附金を出せよとすい世話係
 こればちの寄附返したれ
 横顔をよく見りやはり十五六
 十五六時代の友はなつかしい

胡子神社祭例句會(吳市)

十一月二十日 林野麩光報

御神徳胡子は左派も右派もなく
 一尾の鯛塗勝の格を上げ
 神殿に上ると鯛は尾を上げ
 氣がかりな親は舞台の上で待ち
 口あけて踊る舞台に風があり
 始まらぬ舞台レコードばかりか
 飯舞台でもすばらしい緋がこぼれ
 子の舞台つもの苦勞を忘れてる
 セリうちと袂に入れて宵祭
 遊娘薬先を急いでついで忘れ
 一打もう間に合はぬ遊娘薬
 遊娘薬買はれはならぬ生活むき
 良妻は亭主に現れる遊娘薬
 負ふた子に教へて遊娘薬
 薬屋へ行くと遊娘薬か問はれ
 遊娘薬やつぱり女房不安がり

▼熊本川柳つみ会(熊本市)の
 結成記念川柳大会が十一月廿三日
 代維神社で開催された▼ふあうず
 と川柳社(神戸市)の幹部十数氏は
 十一月廿七日、東洋樹居で我が社
 の路郎主幹を迎え「路郎氏に物を
 訊く会」を催された▼「肥後文化」
 (熊本市)は従来狂句と川柳の寄
 合世帯であつたが、一月から、田
 中辰二氏等の川柳が「肥後文化」
 から離れることとなり当分ブリッ
 ン刊行の由發展を祈る▼せんば川
 柳社(大阪)では十二月四日御盃
 神社で十二月旬会開催▼六文銭川
 柳社(八上町)では十一月廿九日
 夜袋町の柳垂庵で花岡百樹・丸山
 松声追悼句会を開催▼長崎川柳社

川柳不朽洞會

- 指 導 麻 生 路 郎
 池 澤 樂 居
 笠 原 路 生
 長 野 晴 演
 藤 村 一 作
 淺 田 一 郎
 末 弘 太 郎
 中 川 朋 吉
 中 田 守 雄
 白 村 祐 吉
 高 安 六 郎
 藤 村 雅 光
 田 中 辰 二
 洞 友 辰 二
 鳥 山 一 步
 沖 野 岩 三 郎
- 不 朽 洞 會 員
 澤 田 四 郎 作
 高 橋 本 線 雨 乃
 西 野 島 丸
 西 谷 幸 二 郎
 柴 谷 幸 二 郎
 榮 谷 幸 二 郎
 前 田 伍 健 古
 山 路 閑 古
 安 川 久 留 美
 山 本 雨 迷
 高 尾 亮 雄
 田 村 孝 之 介
 龜 井 辰 修
- 一 特 別 會 員
 中 島 生 々 庵
 武 部 香 林

(長崎市)では十一月第二例会を
 月末に開催された▼三池染料志年
 川柳大会(大牟田市)が三池福利
 課主催で十二月十八日に染料寮で
 開催された▼同人句集「第一集」
 が創立三周年記念として十一月三
 日に川柳甘茶クラブ(金沢市彦三
 五番丁)から刊行された四六版二
 ○頁非賣品。▼樹岡詩郎氏(大阪)
 が廿四年九月に病歿された旨、光
 代未亡人からお知らせがあつた謹
 んで悼む。

不朽洞會から

▲中島生々庵博士の新診察所が現
 在の(後方)十二月月中旬に新築さ
 れるところ▼経子省二氏(愛媛縣)
 からの柳信に、十一月十三日三面

子忌「著書もせず三面子忌に呆け
 てゐる」とあつた▼鈴木九坡氏(岡
 山市)は健康が快復したので捲土
 重來の意氣で旬会に顔出しされて
 いるとのこと▼岡弘牛氏(下関
 市)は牛休門と改題された▼麻生
 路郎主幹は山陽新聞(岡山市)の
 夕刊紙「夕刊山陽」の柳壇を担当
 されることとなつた岡山縣、廣島
 縣、山口縣、香川縣、愛媛縣、鳥
 取縣、島根縣、兵庫縣等近縣の柳
 人は元より川柳愛好者の投句を切
 望する▼中島鉄洲氏(鳥取市)は
 早川龍松氏が尼崎市中で亡くなら
 れたので、同郷の故みから同氏の遺
 句稿を取組め供養をされるとの
 こと▼月原宵明氏(高知市)は
 室町六九〇九に居をとり御家族全
 員が移られた▼上田翠光氏(奈良
 縣)は近來、農繁であるが本社の

忘年旬会には飯降白香女史と共に
 出席された▼竹田苗穂氏(大阪市)
 は市電氣局勇退後、三十年間臨日
 もせず働いたんだから寒い間は
 遊ぶと云つて、ちよいと「本社の
 なんば連絡所(顔出し)は昨夏退
 職後養鶏に専心されているとのこ
 と▼葎乃女史は永い疎開生活を打
 切り、十月末、村から街へ籍を移
 された。従つて大和の不朽洞山房
 は十一月限りで解消された▼清水
 白柳子氏(大阪市)は郷里石川縣
 小松市から刊行されている「鴉柳」
 十二月号に「六方燒」を執筆され
 た▼築山快夢起氏(ホノルル市)
 は谷崎、志賀両氏が文化勳章を授
 與されたと云う報を聞き、ハワイ
 タイムスの新年号へ、古川柳の評

- 戸 倉 普 天
 浪 玲 之 介
 小 川 靜 觀 堂
 上 田 翠 光
 米 本 貴 志 子
 大 西 八 步
 一 特 別 會 員
 福 田 山 雨 樓
 寺 井 山 鏡 々
 高 澤 一 浪
 石 井 白 面 人
 戸 田 古 方
 前 山 北 海
 古 川 鹿 花 麗
 岩 崎 山 石
 藤 井 山 郎
 內 藤 草 一 郎
 三 輪 晚 翠
 水 谷 鮎 美
 大 坂 形 夢 裡
 藤 岡 至 藝 瑛
- 井 上 湧 三
 北 林 不 二
 宮 田 妄 夢
 福 田 錦 風
 西 垣 路 三
 川 村 好 郎
 濱 田 久 米 雄
 丹 波 孤 浪 士
 木 村 孤 浪 士
 築 山 快 夢 起
 西 尾 栗 城
 山 東 路 九
 永 田 里 十
 高 田 抱 逸
 石 浦 柳 水
 村 田 流 水
 小 田 沙 兆
 市 岡 曉 舟
 市場 沒 食 子
- 吉 田 水 車
 須 崎 豆 秋
 石 曾 根 民 郎
 中 西 お さ む
 正 本 水 客
 黒 川 紫 香
 竹 内 潮 花
 北 川 春 巢
 布 施 筑 巢
 尾 崎 方 正
 關 根 山 彦
 櫻 川 申 水
 好 崎 小 松 園
 菊 澤 燈 竿
 逸 見 燈 竿
 清 水 白 柳 子
 鈴 木 九 坡
 夷 木 一 笑
 鈴 木 鹿 浪
 小 井 寒 浪
 小 川 恒 明
- 德 永 雅 美
 八 竹 正 柳
 大 森 風 來 子
 岡 下 嶺 泉
 木 島 鐵 洲
 中 川 博 也
 新 川 美 奈 子
 橋 本 綠 之 助
 尼 谷 竹 莊
 水 谷 琴 水
 水 谷 隆 如
 小 橋 隆 如
 弘 津 柳 慶
 吉 田 圭 堂
 稻 葉 鳩 花
 小 坂 慈 雨 來
 杉 谷 湖 山
 増 田 耕 氏
 國 弘 牛 氏
 佐 野 卜 占
- 小 澤 史 葉
 小 西 無 鬼
 大 鶴 喜 由
 久 連 松 春 月
 吉 田 斜 水
 在 間 小 樓
 山 口 秋 花
 富 岡 淡 雲
 藤 田 正 則
 福 島 正 則
 小 田 垣 牛
 渡 邊 孫 拙
 篠 山 壽 彦
 種 瓜 平 雀
 橋 東 平 雀
- 間 島 青 丹
 山 林 正 思
 上 田 貴 論
 友 下 愛 堂
 森 西 柳 堂
 大 田 忠 八
 太 岡 良 子
 靜 岡 忠 八
 岸 井 可 笑
 松 江 梅 柳
 松 井 可 笑
 伊 藤 定 美
 丸 山 弓 削
 直 原 七 面 山
 黒 田 笑 泉
 上 野 粗 影
 狩 野 燕 子
 岩 崎 樹 甫
 石 岡 正 司
 西 森 花 村
 河 村 日 瀾 子

高級化粧料容器には断然!
 ヤマギンの……

黒硝子

大 阪 市 大 道 長 崎 町 四 番 一 丁 日 西 會 社
 山 銀 株 式 會 社
 電 話 旭 川 四 四 七 番

を、報知へは基督教開教九十年を
 執筆されたとのこと。



編輯室にて

▼トラの春と云うと、泉山三六氏を思い出し、ことしは何んだか飲めそうな気がするが、果して飲めるかどうだか。▼新春号は御支援のお蔭で、予定通りに刊行が出来、みなさんの机上を飾り得たことを無上のよろこびとしている。

▼前号で予告した通りページも増したし、表紙も少し厚手の紙を用いたので好評の拍手を送っていただけのことと思う。▼一々紹介の勞はとらないが、寄稿家諸氏がそれ／＼得意の才筆麗筆で、百花咲き匂う紙を呈したので味醗された。▼近來原稿がふくそうするの。誌代に就て親心もいゝが、少しく値上げして頁数を殖してはと云う親切な提案もあるが、このままで押せたら押して行きたいと思つてゐる。そのためには一人が一人購読者を殖やして下さるようお願いしたい。▼旧冬は健康を書して皆さんに心配をかけたが、とう／＼押し切つてしまつた。ザツト五十日は無理と知りな

がら会合にも顔を出した。もう大丈夫だ。御放念下さい。▼御多用のため年賀廣告に乗り遅れた方々は、大至急寒中見舞廣告として掲載方を申込んでいただきたい。(路)

社の黒板

▼本社新春句會は一月七日午後五時半から大阪市南区饒谷仲之町(三休橋南詰)の大室文化會館三階で開催(句會案内が全所へま

食品衛生法
検査合格品

砂糖なくとも カリジン錠

最も合理的な…サツカリン・プルチン混合錠

大阪 東洋製薬化成株式会社 道修町

ざれ込んだとしても出席して下さい。忘年会よりもつと盛大にやりませう。
兼題「日の出」路郎選「餅」鮎美選「銀行」残食子選(各三句)
▼川雑などは連絡所の時間を十二

月廿日から下記の通り改正。毎日午後一時—五時三十分まで。日曜、祭日、十三日は休み。電話での御用は南(75)壺式壺四・壺式壺五番。歳末は三十日まで、年始は七日から出所。

なんば連絡所は北極星の三階の二階と云うややしきですが、藍田さんは三階半ですネとおほせられる。何れにしてもここから見下ろす裏町には僅か一丁の両側に廿五軒の飲食店が軒を並べており、和風欧風とりとで、飲食店でない店は一軒もないらしい。食の倒れの大阪を如実にも知れないが、おそろしいことである。

シマズに ヨクキク



大學目薬

結膜炎
トラホーム
つかれ目



至天堂製薬

趣味と教養の殿堂

松坂文化クラブ

● 會員募集 ●

目録
 華道(小原流・末生流)
 茶道(表千家流・宗徳流・沓・花月流)
 洋裁・書道・日本舞
 華道・舞樂
 手鞠・古典・新舞踊
 長唄・小唄・謡曲
 服飾デザイン

詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ

松坂屋

大阪日本橋
電番一七一〇

Made in Occupied Japan

川柳雜誌

第五卷 第一号

一册 金三〇〇円 (送料三四円)

半ヶ年概算 金一九八円
一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿四年十二月廿五日印刷
昭和廿五年一月一日発行

大阪市住吉區代四十五丁目二番五号
電話四八八

行印刷人 麻生 幸二郎
大阪市住吉區代四十五丁目二番五号

発行所 **川柳雜誌社**
電話四八八 大阪七五〇〇

募 集

課題吟募集

夫婦 (十句) 大森風來子選 (二月五日締切)

土産 (十句) 橋本縁雨選 (三月五日締切)

毎号募集

近作柳樽雜誌廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雅吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽詞會員に限る。

R列5号 毎月一回一日発行